
とある無敵の法則解析《アナリーロウ》

マセリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある無敵の法則解析
アナローグ

【Nコード】

N6467W

【作者名】

マセリ

【あらすじ】

一人の少年が“とある魔術の禁書目録”の世界に転生した。幼馴染は垣根帝督。クラスメートの上条当麻とは親友で、絹旗最愛という義妹が居る。

とてつもない環境だが、彼の一番の問題はその超能力。

“法則解析”……この世の法則を捻じ曲げるLEVEL5で、序列は最強の第零位。

そんな彼の過ごす日々を、ここに綴ろう。

気がつくとも液体に満たされた空間に居た。

「……………はあ!？」

と言おうとしても声が出ない。何がおきているのかさっぱりだ。いつものように学校へ向かうため、玄関の扉を開けたはず。それが急に暗転して気がつくとも真つ暗闇なのは随分と世話がない。どういふことかもさっぱり分からず、その液体に満たされた空間でしほの時を過ごした。

『聞こえているかな……………?』

あん? なんだ?

『聞こえているようなら何よりだあいつ藍藤静那君』

誰だ……………テメエ。

脳内に直接響くような声。まあ当然だろう。俺は今、液体の中にいるのだから。

『簡潔に述べれば、神の如き者だな』

それなんてフィアンマ?

『む。そのツッコミが出てくるようなら問題はないのかもしれないな』

声が少し楽しそうなトーンに変わる。
ていうか、アンタも知ってるのか。禁書。

『ああ、知っているさ。さて、与太話はこのくらいにして、君の状況を話そう』

！ アンタ俺の状況知ってるのか。

『そりゃ知っているさ。私がこの状況にしたのだから。……とりあえず簡単に。君は転生したのだよ』

転…生……？

ってアレか？ 意識持ったまま別の人間になるってヤツか？

『まあ、そんなところだ。君は、とある魔術の禁書目録の世界に生まれ変わることになったのだ』

禁書の世界に！？ なんでまたそんな……。

『いやあ、君ほど元の世界に幻滅している人間を見ているのもいろいろと切なくてね。どうせなら楽しい世界へ飛ばしてやろうと思っただのだよ』

驚いた。いや……正確には感謝のあまり声も出ないってヤツか？
……現実世界には確かに辟易していたからな。まさかとは思うが転生などとは恐れ入った。

『感謝の言葉はありがたく受け取っておこう。君があの世界に行けば面白いな、と私も思っていたからね』

禁書の世界か。楽しみだ。

『おっと、そろそろ時間がない。もうそろそろ出産だろうから、私はお暇するとしよっ』

は？ 出産！？

と思ったのと同時に、俺は世界に生を受けた。

002 幼少時代(前書き)

駄文ですが、お付き合いください。

002 幼少時代

驚くことに、俺の名前はそのまま変わらなかった。

あいつ藍藤静那……先に言っておくが、俺は男だ。

現在、この世に生を受けて六年になるのだが、その間に両親から得た情報を並べると。

間違いなくここは禁書目録の世界。学園都市は存在し、超能力や超科学と言った単語も時折耳にする。

ついでに言っておくとここは学園都市ではないらしい。比較的近い場所ではあるようだが。

さて、そんなところで、ひとまず現在の状況を纏めよう。

- ・俺が知っている禁書の世界の物語は、まだ始まっていない。
- ・原作は一通り読んだから、先の展開は読める。
- ・当然、今の俺に能力はない。
- ・驚いたことに、俺は元の世界での六歳のころの容姿とほとんど変わらない。

こんなところか。

ところで、なんで原作の物語が始まっていないか分かるかというのだが……。

「しずな……！」

「よう、帝督」

垣根帝督、という幼馴染が居るからだ。

茶色というよりもはや金髪に近い地毛は、俺とくつつくとより目立つ。なんせ俺が漆黒の髪だからな。

「小学生になつたらさ、しずなは学園都市に行くのか？」

「うん、俺は行かないと思うな。お母さんが許さないと思うし」

「そっかー。んじゃ俺も行かないや」

「帝督もか？」

「うん。だって、しずなと超能力で戦えないし」

………待て。貴様はLEVEL5の第二位だぞ。戦わせるつもりか俺を。

「じゃあ、中学から行こう」

帝督はそう言って笑った。そうだな、中学なら流石に許してくれるかね……？

002 幼少時代（後書き）

はい、短く済ませます。学園都市に行ってから、長文になると思います。

ちなみに、名前の拳がったお母さんですが、出てきません。というかもう、次から学園都市……ようは中学生です。

003 身体検査（前書き）

学園都市編、スタート！

003 身体検査

小学六年の三月。帝督も俺も、かなりの問題児として学校の先生から睨まれていた。

そんなことお構いなしに今日も給食のワゴンでレースゲームを展開し、放課後の校長室行きが決定している。

「やらかしたな静那！」

「お互い様だろうが」

HRが終わり、放課後。校長室に行くこともなく、夕暮れの教室……俺の席で帝督と笑いながら話す。

窓側後ろから二番目の俺に、後ろから三番目の帝督は席をまたいで向き合っていた。

「ところでよ」

「あん？」

「卒業したら、学園都市行きだな」

帝督よ……こちら生まれで12年、それが一番楽しみだったんですぜ。

「楽しみだよな」

俺が笑うと、帝督も返した。

コイツとは本当に思考回路が似ていて嬉しい。ケンカも沢山したけれど、それ以上に深く強い絆があるような気がした。

帝督が続ける。

「超能力はとりあえず欲しいよな」

「おう。LEVEL0にはなりたくないね……」

つつつても、お前はLEVEL5なんだけどさ……第二位なんだけどさ……。

「？ どうしたそんな打ちひしがれたような顔して」

「いや……ところで帝督はさ、どんな能力が欲しい？」

「ん？ そりゃ……」

顎に手を当てて暫し考え始める帝督。コイツのことだからとんでもないこと言いそうなんだけど。

「俺は……とりあえず本当に“自分だけの現実”が欲しい。誰とも同じじゃない……自分だけの」

ワンオフアビリティか。カッコイイこと言うじゃねえか。

そういうお前は？ と聞き返す帝督に、俺も少し考える。どんな能力が欲しいのだろうか。やっぱり、負けたくないよな。帝督にも、まだ見ぬ第一位にも。だとすると、やっぱりワンオフアビリティであることは必須条件だろう。

「この世界をひっくり返してみたい……かな？」

「はあ！？ それは能力で、か？」

驚いた顔の帝督。……ああ違う違う。

「本当にひっくり返すんじゃないで、常識を覆す的な」

「常識を……覆す」

俺が笑つと、帝督はなにやら呟いた。ついで、物凄く良い笑顔で俺を見る。

「いいな！ それ！ 常識を覆す！ 俺と静那で、学園都市を打ち破るような能力得て…… “最強の二人組” になろうぜ！」
「……………」

最強の二人組か。カッコイイな。俺の能力さえ、強ければ。帝督と二人で、学園都市でやりたい放題できるかもしれないねえ。

「よっしゃ！ 決まりだ！ 俺と帝督で、学園都市の最強になるぜ！」
「おっしゃあ！」

と、叫んだ瞬間に教室の扉が開く。

「テメエら、校長室に来い」
「……………」

@

晴れて俺たちは卒業した。今は、学園都市に向かうバスの中だ。

「帝督」

「なんだよ静那」

「服は持ったか？」

「ああ」

「勉強道具は？」

「ああ」

「歯磨きは毎日するのよ？」

「お母さんかお前は！？」

と、帝督にダル絡みの真っ最中。というのモと。

「……長い」

学園都市に入る検閲みたいなのが、偉く混雑しているのだ。

予定ではもう学園都市内のホテルに荷物を置いてはるはずなのに。

「今日の予定ってどうなってんだっけ？」

帝督の持っているパンフレットを覗き込む。

「……このあとはホテルに荷物を置いてから、システムスキャン身体検査だな。やつと能力が分かるぜ」

「そうか。もう能力がわかるんだな」

感慨深く窓の外を眺める……車ばかりだ。風情がない。

帝督にちよんちよんと肩をつつかれる。

「……どした？」

「いや、このバスに乗ってんの、うちの学校出身ばかりだなと思っ
て」

「そりゃ、うちの地区から出発したバスだからな」

「……なんか自信なくなってきたよ」
「はあ？」

「どういうことだ？ 俺が問いかけると、ため息交じりに帝督は答えた。」

「ここに居る全員でも、一つの小学校出身に過ぎない。学園都市の学生180万人の多さが少し分かってさ。その中で最強なんて、本当になれるのかと、な」

「……なるほど。でも、自分を信じてみるほうがいいんじゃないか？ 今のところ学園都市のLEVEL5は多くはないけどさ……だからといって可能性がないわけじゃない。宝くじも買わなきゃあたらねえって」

「そうか、そうだよな」

少し落ち着いたのか、微笑む帝督……お前。

「その笑顔、絶対女の子に見せるなよ？」
「は？ なんでだよ！ なんですか？ 俺はデスマイルなんですか!？」

「それでいいからやめとけ。……収集がつかなくなるぞ」
「なんでそんな真剣なんだよ!？ 俺の顔の造形に何か問題が!？」
「問題が無さ過ぎるから問題n……いや、そう問題大有り」
「今何か言いかけたよな!？ 問題大有りってひどくね!？」
「うるせえよバレンタイン30個もチョコ貰いやがって!」
「お前だつて20個近く貰ってただらうが!」

「俺はチョコ好きじゃないから問題ない」

「どんな理論だよ!？ もはや屁理屈でもねえよ!」

「……はあ、帝督はいつからこんな細かい男に」

「成り下がったよ失望しました”みたいなこと言ってるんじゃない

よ！」

「……みんなが注目してるよ？ ついでに俺は小声だから、帝督が一人で怒鳴っているように見える」

「！？ こんのヤロオ……よほど愉快的死体になりてえと見える……」

……

「愉快的死体ってなんだよオイ……お？」

「ん？」

「学園都市の中、入ったぜ」

学園都市内に入ると、何もかも見違えていた。街並みも美しく、超科学の産物という噂も素直に頷ける。

「おい静那！ なんだよあれ！」

「……自走しているみたいだな」

「ゴミ箱……か？」

「自走するゴミ箱……メリットがあんまり見当たらないけど」

そんなことを言いあっていると、まもなくバスは停車した。

『皆様、学園都市へようこそ。バスを降りてホテルに荷物を置き、またここに戻ってきてください。発車は10分後になります』

「降りるか」

「おう」

俺たち二人も、子どもの集団に混じってタラップを降り、スーツケースを引き摺りながらホテルに入る。

「確か、俺と静那、そいから女の子が二人相部屋みたいだな」

「女の子と相部屋とかアリなのかよ!？」

いや……まだ俺は中一なんだ……そう考えれば有りな気もす「……
いやしねえよ！

「まずいだろ！」

「いや……学園都市一人目の女の子を手にするチャンス」

「コロスヨオマエ」

「なんで片言だよ！？ 怖えよ！」

「イケメンは死ね！」

「お前に言われたくねえよ！」

「……へ？」

「自覚ナシか……コイツ、性質の悪い鈍感になりそうだな」

「何言ってるんだ帝督」

「いや……なんでもない。ほら、この部屋だ」

303号室と書かれた中々豪華な扉に、帝督がカードキーを照合する。カチャン、と音がして、一人で扉が開いた。

「誰も居ねえな」

「ああ。ま、荷物だけ置いていくか」

@

そのホテルからまたもバスに揺られること30分。こじんまりとした研究所に、俺たちは居た。

「ここが、身体検査会場なのか……」

「常識を覆す……なあ静那？」

「どうした？」

研究員の案内で、コツコツと靴音が響く廊下を歩く俺たち。

「常識を覆す能力、お前はどんなものを考えた？」

「……帝督は？」

「俺はもう決めた」

「マジか！」

俺の声が音響のように響き、帝督は指を口に当てる。

「……俺が考えたのは、この世のものじゃない物体を作り出す能力だ」

「この世のものじゃない？」

「そう。この世には存在しないもの」

「……創造能力か？」

「ちよつと違うんだけど……よっしゃ！ 静那にも理解できないっ

てことは、俺の現実は確立されたようなもんだ！」

目の前でガッツポーズを取る帝督。このメルヘン野郎、と言いたかったが、意味不明なのでやめておく。

一頻り感動し終えたのか、帝督は俺のほうを向いた。

「静那は決めたのか？」

「……帝督のは反則技だな。俺のも同じくらい反則だけど」

「聞きてえ！ 教えるよ！」

「俺のは……簡単に言えば、この世の法則を捻じ曲げる能力だ」

「…………？」

「例えば、俺にかかる重力を変化させて空を飛ぶとか…………相手の能力を逆算して改造したりとか」

「相手の能力を改造？」

「そう。例えばさっきの帝督の能力なら、その作り出した物体が“この世にあるもの”に変えちまったりな。そうすれば、それに対抗する物体を俺は生み出せる」

「は…………反則…………」

「だろ？ でもどうせ言ったままの能力が手に入るわけじゃないからな。そのくらい大きく考えておいたほうがいいさ」

そう言った俺の目の前にはもう、電極がいくつもついたベッドがあった。

004 VS 帝督(前書き)

つつつても練習試合(笑)

004 VS 帝督

目が覚めると、暗闇だった。

「……………ここは？」

『ここは……………学園都市の中心だよ。藍藤静那くん』

「！？」

声のしたほうを見ると、円柱状のビーカーのようなものに入った、逆立ちの変態が居た。

『変態などと言われたのは初めてだが……………』

「読心術ですか？」

声に出してはいないはず……………。

『違う。君は今、身体検査の会場で眠っているはずだ。意識だけをここに持ってきた』

意識、だけを？

『そう。私はアレイスター・クロウリー。学園都市の統括理事長をしている』

「統括理事長！？」

逆立ちの変態が統括理事長だなんて……………。

『だから変態ではあるまいに……………』

「それで……………なんで俺はここに？」

『ああ、そうだった。君の能力についての話だ』

「……………」

『君の能力は“アナーローウ法則解析”……全く、私もこんな反則が出てくるとは思っていなかったよ』

アナーローウ
法則解析？

『君の能力は、この世の法則を捻じ曲げる能力だ。最も、人の身で出来ることには限界があるのだが。とにかく、一つだけ言って置く。この学園都市で、君の存在は無敵に近い』

「……………」

俺の現実が認められたってことか！？

『まあ端的に言えばそういうことだ。能力の発現レベルはLEVEL 5。つまり、現時点での最強だ。さて……本題に移ろう』

「なんで俺が呼ばれたか？」

『そうだ。君はこの学園都市がなんのために存在しているか知っているかい？』

確か……LEVEL 6だっけ。

『そう。神ならぬ身にて天上の意思に辿りつくもの……LEVEL 6を誕生させることだ。はっきり言えば、現時点では君が一番近い』

「！？」

『だが……なのだよ。君の力は先ほども言ったようにほぼ無敵。そんな人間がLEVEL 6にまで上り詰めてしまったら、もう人間界では誰も対処できなくなる。君の周りに誰も居なくなっただけで孤独になるのは嫌だろ？』

「……………」

『結論を言おう。君はLEVEL5だが、LEVEL6にはしないつもりだ。メインプランは今まで通り、一方通行……第一位にやつてもらおう』

「俺はどうすれば？」

『序列、は知っているね？』

「LEVEL5にだけある、アレですよね？」

『そう。君の序列は第零位。これは公開するつもりだ。なんで零か、までは絶対に他言無用だ。……まあ、同じLEVEL5にならなくてもいいぞ。君の親友になら、ね』

「帝督はLEVEL5なんですか！？」

『ああ。おそらく序列は第二位。彼にはスペアプラン……LEVEL6シフトの二番手を担ってもらおうからね』

そっか……帝督はLEVEL5か！

『そこで、君を呼び出したもう一つの理由だ』

「……？」

『LEVEL6には、遠からず誰かが辿りつく。その時に、もしその人間が暴走するようなら。君が歯止めになって欲しい』

「……分かりました」

『そうか。なら話は終わりだ。君には私への直接交渉権を与えておく。ケータイに私の番号が入っているだろうから後で見たまえ。と言っても、私からは念話だがね』

その直後、俺は再度意識を失った……。

@

「……………きろ！」

あん？

「おきる静那！」

目を開けると、天井と俺の間に、とても良い笑顔の帝督が居た。

「どうしたんだよ、随分と嬉しそうだけど」

「俺もお前も、LEVEL5だ！」

「……………マジか」

どうやら、今までの会話は夢ではなかったらしい。

ということは、目の前に居るのは学園都市の第二位……ダイクマター未元物質の垣根帝督だ。

「俺の現実、本当の現実になったんだよ！　これがハイテンションでなくて居られるか！」

「はは、そうだな！」

いつの間にか俺も笑顔になっている。

おきれば、そこは会場ではなくて先ほどのホテルだった。

「……………いつの間に戻ってきたんだ？」

「お前がずっと眠ってるから、そのまましょっ引いてきた」

馬路ですか。もといマジですか。
脳内でくだらないことを考えていると、隣からガタン、と音が聞こえた。

「……………」

ベッドから起き上がり、横を見ると。一人の女の子がこちらを睨んでいた。

ていうか胸でか！？ なんすか！？ 中一だろ！？

黒髪を背に流したその子は、俺が見ると、顔を赤くして目を背ける。……………ええと。

「忘れたのか静那。女の子と相部屋」

「ああ……………あつたなそんな話も」

すっかり忘れてたぜ。ていうか、この子のほかにもう一人居るはずじゃ……………居た。

ベッドから目から上だけ出してこちらを見ている。……………なんですかこのカオス。

「じゃあ紹介するな。黒髪美人のあの子が、吹寄制理さん」

俺を睨んでいた子が、目を背けたまま軽く頭を下げる。

「んで、こっちの金髪少女が、かさねりな重音里奈さん」

目だけ覗かせている女の子が、こちらに視線を合わせて挨拶。小声でこんにちはと聞こえた。

「んでこっちな。俺の幼馴染の、藍藤静那だ」

「よろしく」

俺が軽く手を振ると、吹寄さん……だったか。彼女が口を開いた。

「貴様が……第零位と発表された法則解析アナリーロウなの？」

二人称貴様かよオイ……。

「もう発表されたのか……早いな学園都市」

「あの、さ……」

「あん？」

恥ずかしそうに手を擦り合わせながら、またも目を背ける吹寄さん。

「私、LEVELOなのよ。だから、能力を見て見たいな……って思ったんだけど、ダメ、か？」

「能力を？」

「ちようどいい！」

いきなり声をあげた帝督……あん？ どこだ？ ……居た。なに
重音さん口説いてんだテメエ。

「俺と一回勝負しろ！」

……マジかコイツ。

@

その数分後。俺たちは、ホテルの外にある公園にいた。もう夜遅く、誰もいないようだ。

相対する俺と帝督のほかには、少し離れて吹寄さんと重音さんも居る。

「いくぜ……静那！」

「望むところだ！」

正直一回も使ったことがない能力。どの程度扱えるかは分からないけれど。

俺はただ単に帝督に突っ込んだ。

「直接攻撃かよ……能力使えよ」

そう呟いた帝督。突如その背中に六枚の翼が勢いよく生える。俺のグーパンチをかわすように、後方へと羽ばたいた。

「羽かよ」

「羽とか言うなしー！」

怒鳴りつつ、帝督はちょうど二階ほどの高さまで飛び上がる。

「……何よアレ」

「す……」

吹寄さんと重音さんの眩きが聞こえる。ていつか、帝督派手だなあ。

「んじゃ、俺も飛ぶか」

俺にかかる重力を急激に下げる。そしてそのまま、俺に対する風の抵抗力を極限に下げる。

「なに！？」

「いくぜ」

そのまま突進。風の抵抗は全く受けない。一瞬にして帝督の前へと。そのままグーパーパンチを繰り返す。

「ッッ！」

帝督はその翼で俺のパンチを防ぐと、もう一段階上昇した。

「俺の能力言ってなかったよな。俺の能力は“ダークマター未元物質”この世に存在しない物質を生み出し、操る能力だ！」

「……本当に厄介な能力だぜ」

突如、翼から数多の光線が射出された。

「なに！？」

「街灯から出ている明かりをレーザーにしたただけだ」

「んなこと出来るわけ……」

「ないよな？　だが静那。“俺の未元物質に、その常識は通用しねえ”」

「！？　カッコイイセリフ吐きやがって」

さてどうするか。コイツの非常識な攻撃をかいくぐるには……

「苦しいだろ」

「な……にを……?」

「お前の周りに、大量の酸素と結合する物質をばら撒いた。呼吸困難になるのは当然だ」

殺す気か!?

この野郎、やってくれんじゃねえか。

「うおおおおおおお!」

「!?!」

俺は力を放出する。それは、公園全体に広がった。

「何をした?」

帝督の体には、なんの問題もない。当然だろうな。

「さあ、何をしたでしょう」

「呼吸が戻ってる!?!」

俺を呼吸困難にした罪、償いやがれ!

そのまま、空中の帝督に突っ込む。そのまま、グーパンチを繰り返した。

「……! 光線が発動しない!?!」

「はは! 当然だ! 今、この公園には既存の物質しかねえよ!」

「！ 朝に言ったことをやりやがったのか！」
「お前の生み出した物質全て、まとめて窒素で燃やしたんだよ！」
「窒素で！？ そんなことできるわけが！」
「^{レベル}法則は俺が作り出す”！」

一発帝督の腹に拳打を叩き込み、勝負は決した。

@

戦闘後……真夜中の303号室。

「まさか……あんなにあっさり負けるとはな」
「ていうか殺す気かお前。呼吸困難とか」
「そついうな」

俺たちが談笑していると、吹寄さんも入ってきた。

「貴様たち……戦闘がハイレベルすぎて何やってるのかわからない
じゃない！」
「LEVEL5だけに」

横からぼそつと、重音さんが呟く。上手いこと言っちなオイ。

「そついえばさ、静那」

「あん？」

「中学、どこにするよ」

「ああ………適当でいいよ。寮が綺麗なら」

「俺も同意見だから悩んでるんだけどな？」

帝督が苦笑する。すると吹寄さんが言った。

「私が行くこうとしてるところ、結構綺麗な校舎よ？」

パンフレットを取り出して吹寄さんが開いたページを、帝督と俺で覗き込む。

重音さんも同じように、吹寄さんの後ろから見ているみたいだ。

「柵川中学………？ 帝督、聞いたことあるか？」

「んにゃ、無い」

吹寄さんがパラパラとページをめくっていく。なるほど確かに校舎は綺麗だ。近代的ではない、シンプルな校舎だが。

「寮はどうなってるの？ 吹寄さん」

「………制理でいいわよ？」

「吹寄さん？」

「制理」

「吹＼」制理「………はい」

目が………目が怖いです。

「それに、貴様たちと行けばいろいろ能力にも変化があるかも知れないし」

「そっか吹＼………制理はもうこの学校で決めるんだ？」

「そうね。あまり高能力者がいないところが良かったし」
「……高能力者が居ない？」

その言葉に反応したのは、帝督。

「そうよ。大体高能力者っていうのは名門の中学やら高校に行くからね……ここは、普通の学校」
「エリート意識の人が少ないんです」

重音さんもアドバイスしてくれた。なるほど、俺もそういうウザイのは居ないほうが嬉しい。

帝督はまだ不安が残るようで、制理に問いかける。

「でも、それって俺たちが行くのはまずくないか？」

「大丈夫よ。柵川はむしろ高能力者を募集してるんだし。実績がないからみんな行かないけど」

「なるほどな。……静那はここでいいか？」

「小六の頃にした約束が果たせるならどこでも」

俺が言うと、帝督も笑う。

「当然。どこでも果たせるさ」

「ならここでいいよ……重音さんは？」

「あたしもここでいいです」

「なら決定だな。いざ、柵川中学へ！」

いつの間にか四人一緒に行ける学校を探していたが、まあいいだろ。

「ところで、静那。約束って何よ？」

「ああ……俺と帝督で、学園都市最強の二人組になる！ てヤツだ」

「そうそう……って静那」

「あん？」

「もう……序列的には最強じゃね？」

「あ」

翌日。四人で柵川中学に入学届を出すと、校長は泣いて喜んでた。LEVEL5が二人も！とか言ってたな。うん、悪い気はない。

その日のうちに寮が与えられ、そこで一旦制理、重音さんとは別れた。

寮部屋は、帝督と隣同士。最上階ということで見晴らしもよく、三年間過ごすのになんら問題はなさそうだ。

俺が寮部屋に届いた物資を片付けていると、チャイムの音がした。

「……帝督か」

「よう、買い物行かねえ？」

適当な身なりで、繁華街へと出かける。買う物を聞くと、主に食材だった。お前、意外と自炊派か。

ちらちらと、通りすがりの女の子たちが帝督を見ていく。

「……ツツ、これだからイケメンは……あ？」

帝督に向かって文句を言うと、同じ言葉が帰ってきた。なんすか、嫌味っすか？

ぶつちやけ身長は同じくらいだけれど、コイツのツラはどう考えたってモデルかなんかだ。元の世界でいうなればジャニ〇ズ。

「なんで八モんだよ teme」

「うるせえよ帝督このイケメン野郎が」

「テメ……ハア。ほら、着いたぞ」

目の前にはスーパー。学園都市といえど、スーパーは一緒か。

……あん？

「オイガキ！ 何で黙ってたんだよ！」

「つく！」

……オイオイ。何事だよ。スーパーの脇で女の子が数人に囲まれてやがる。路地裏ならまだ可愛げがあるが、白昼堂々天下の往来で何してんだよ。

って、いつの間にか帝督スーパー入っちゃってるし。はあ、俺が助けるか。

「……何事だテメエら。白昼堂々と」

「ああ！？ 部外者はすっこんでろ！」

「いやあ、部外者どうこうじゃないだろ……大丈夫か？」

「このくらい……超平気です」

「ふざけてんじゃねえぞクソガキ！」

俺が手を差し伸べた少女に、殴りかかろうとする輩が一人。

「ちよつと黙ってるハゲ」

「ぐわあ！」

目の前のスキンヘッドの周りだけ、重力を五倍に設定する。押しつぶされた男は、懸命に立ち上がるうとするが無意味。

「何しやがった!？」

「殺すぞコルア！」

喚く男ども。黙れつての。

「殺す？ 殺せるモンなら殺してみ？」

帝督との戦いのあと、かなり自分の能力を研究した。考えれば考えるほど、俺の能力はチートなんだよ。

……喰らえ。

俺が力を放出した途端、連中の動きが目に見えて遅くなる。ボブカットの少女も、目を丸くしてこちらを見た。

「ハエの目ってしってるか？」

「なに……？」

「あいつら、人間よりかなり速い速度で動くし、人間が新聞紙やらなにやらではたこうとしてもかわすだろ？ あれつてさ、アイツらの目に要因があるらしくてな。あの目、人間の動きなんざスローモーションに感じてるらしいぜ？」

「な……にを……？」

「だから、今やってんのはその応用。“ハエの目が感じてる速度に、この空間を設定した”」

「……！」

少女はもはや啞然としている。重力を操ったあとに、時空を操るのだから当然か。

「こんなこと、できるんですか……？」

「普通は出来ない。けど、“法則ルールは俺が作り出す”」

「……！」

「さて、俺はフェミニストなもんでな（嘘）、女の子が傷つくの

を黙ってみてるわけにやいかねえんだ」

「今、かつこ嘘って超聞こえましたけど!？」

「……つつーわけで、俺の法則^{ルル}では死体決定だゴミクス共」

超スルーですか……という少女の声を無視して、俺はそのまま目の前の空間の重力を100倍に設定した。

@

「……さて、少し話をしようか」

場所を変えて路地裏。そこにあつたドラム缶に少女を座らせ、俺は目の前にしゃがみ込んだ。

改めて見ると、まともな服装じゃない。工場の作業服みたいな格好だが、ところどころ肌が露出しているほどボロが酷い。一体どんな仕打ちを受けてきたのかと、今にも詰問したいくらいだ。

「とりあえず、名前は？俺は藍藤静那ってんだ」

「絹旗……絹旗最愛です」

「じゃあ、最愛。何があつたんだ？服もボロボロだし、傷も見える。とても、まともとは思えないんだけど」

俺が聞くと、最愛は俯いて呟いた。

「……暗部を知らない表の人間が、超分かるわけないです」

「……それでもだ」

「表の人間を引き込むわけにはいけません」

「あのな……とりあえず話してみる」

「だから！ 表の人間は超踏み込んだんじゃない問題なんです！」

キツと俺を睨みながら声を上げる最愛。だけど、目には涙が浮かんでいた。

「なあ最愛。表とか裏ってさ、どこで区切られてんだ？」

「……」

「俺には最愛が言う裏とか表は分からない。でも、それって分からなくてもいいんじゃないか？」

「……？」

「むしろ、分からないほうが良いと思う。自分が裏の人間だと思っから、表の人間を遠ざける。逆もまたあるかもしれない。でもさ、そんなの、あっちゃいけないだろ？」

諭すように、最愛の肩に手を置いた。彼女はボロ布のような右袖で目を押さえて嗚咽していて、とても話せる状況じゃ無さそうだから、俺が一方的に話す。

「大丈夫。最愛は裏とか表とか関係なく、良い子だと思うよ。今だつてきつと、俺を巻き込まないために話さなかったただけだろうし。それは、最愛が否定しても気にしない」

そつと、彼女を抱きしめる。俺の胸に、ちょうど顔が来るように泣くなら、人に縋ってなければいい。

一頻り泣いた最愛は、少し落ち着きを取り戻したあと、この次

第を話してくれた。暗部の組織で下働きをさせられ、チャイルドエラーなのをいいことに実験すらもされ……クソ野郎。

「ちよつと待つてる最愛」

「ふえ？」

俺はケータイを取り出し、二つの電話をすることにした。

「……………お。もしもし、帝督か？」

『あん？ テメエどこに行ったかと思えば』

「悪いんだけどさ、買い物終えたら荷物を置いて、スーパーの前きてくんねえか？」

『はあ！？ なんでだよ』

「簡単だよ。……俺らの伝説の始まり、冒頭部分を綴るだけさ」

『……………フ。すぐに行く。待ってる！』

よし。とりあえず一人。

「今の相手は誰なんですか？」

「俺の親友さ」

「へえ……………超羨ましいです……………」

「さて、もう一つ」

「……………繋がったか」

『なんのようだ……………いや、分かっているさ。許可しよう。あの研究所はもう必要ないからな』

「どうやって知ったかは聞かないっすけど……………もう一つお願いがあるんすよ」

『……………？』

「戸籍。俺に妹を追加」

『なるほど。君は優しい人間のようにだ』
「自己満足さ」

よし、これでオツケーだ。

「今の相手は誰なんですか？」

「統括理事長さ」

「へえ……超羨ま……て、え！？ 統括理事長！？」

「ああ。俺の恩人……かな？ 変態だけど」

「変態！？ 超統括理事長のイメージが！」

俺の脳内に抗議の念話が届いた気がするが、気にしない。

「静那さん……統括理事長と超パイプがあったり、超トンでもない能力を使ったり……超何者なのか問い詰めます！」

「……しがない中学一年生だよ？」

「超違います……」

茶番は置いておいて……とにかく。最愛を痛めつけた施設をぶっ潰す。

最愛の案内で辿りついたのは一つの研究所。
ここで最愛は実験動物にされていたらしい……。

「許せるわけ、ねえな」

「ああ。きてくれて助かったよ、帝督」

ことの次第は説明した。あとは、俺と帝督でこの研究所に突っ込む。

「私も超行きたいんですけど……」

「ダメだ。お前の能力は知られているし、当然それに対する対策は打ってあるはずだ。なら、わざわざ最愛を危険に晒すことはない」

俺が首を振ると、最愛は黙って頷いた。

「しおらしいのが、少し愛らしい。」

「終わったら、一緒に映画見に行こうか？」

「映画……ですか？」

「俺も詳しくは知らないんだけど、最近はB級映画ってのが流行らしい。な？ 行こうぜ」

微笑んで最愛を見やる。彼女は頬を赤らめて、頷いた。

「超約束しましたからね？」

「ああ。絶対だ……帝督、行くぞ！」

「へいへい……俺もさっさと里奈ちゃん攻略するか」

なんだかテンションの低い帝督だったけど、なんかあったのか？
最愛を研究所の前に置いて、俺たちは走り出した。

@

「侵入者を発見しました」

「何？ …… 見ない顔だな。まあいい。実験動物は放っておけ。キヤパシテイダウンを設置しろ！」

「了解！」

「さて、我々は避難だ……いや、頭に乗っている小僧を殺すのも悪くない、か」

「意外に、誰もいねえんだな？」

「みただけど……油断はナシで行こう」
「もちろん」

とにかくすることは二つ。ここのシステムのダウンと、主犯研究者の排除。

どこに居るかまでは分からないが、とりあえず最愛から地図は貰ってんだ。地下三階のデカイ施設が研究所に違いねえ。

「静那」

「あん？」

走りつつ、横から帝督の声。

「こっから、俺たちの伝説が始まるんだよな？」

「ああ。名実ともに最強の二人組……その幕開けだ」

「……ガラにもないほどテンション上がってきちゃった……最愛ちゃんののためにも、俺たちのためにも、この研究所はぶっ潰す！」

「当然！」

地下二階から、降りる階段を見つけた俺たち。実際何度か襲撃があつたみたいだが、帝督の末元物質で全て防いでいる。ぶっちゃけ、気付かないうちに帝督が片付けていた。

「さて、おそらくこの階段の下が研究施設だ」

「ああ……所謂ラスボスだな」

「行くぞ、帝督！」

「もちろんだ静那！」

俺の能力で階段を破壊し、そのまま飛び降りる。大きな扉があつたが、帝督の翼で粉碎した。

「おやおや、画面で見るとよりもガキじゃないか」

「デメエが主犯か……」

白衣を着た、白髪のジジイがそこに居た。見るからに小バカにし

たよつな視線。俺たちを前にして、余裕だな。能力は見てると思うんだが。

「お前らがキどもがどんな能力を使うかなんて関係のないことだ……ワシの研究の邪魔はさせん！」

「最愛を実験動物にしておいて何をふざけたこと抜かしてやがる！」

「最愛……？ 検体番号で言ってもらわんとどれのことやらわからぬな」

「このや「テンメエ！！！」帝督！」

帝督が低空飛行で突進する。が、ジジイはニヤリと笑って、ボタンを押した。

キイイイイイイイイ

「ぐわ！？」

「……帝督！」

突進途中で帝督の翼が消滅し、帝督は頭を抑えて屈みこんだ。……俺も頭が割れそうだ。

それを見たジジイはあざ笑うように言う。

「こいつは能力者に反応する装置だ……お前らがどんな能力者だろうと関係ない……その意味が分かるかね？」

俺と帝督が黙っていると、自分に酔ったジジイはさらに続ける。

「これはまだ未完成だ。強い能力者にしかあまり反応せんしの。だ

が、好都合だ。お前らはかなり高位の能力者だったみたいだしな……ふえっふえっふえ！　ざまあないの！」

俺と帝督が何事も無かったようにジジイの話を聞いてても、まだ続ける。

「ワシはまだまだこの研究を続け、ゆくゆくは能力者どもを従えて学園都市を掌握する！　まさに、まさにこれは最高の発明！　ワシは……ワシは！　最高の科学者となるのだ！」

帝督、欠伸すんなよ。

「ワシは……ってむう！？　なぜ！　なぜキャパシティダウンが効いてない！」

あ、やっと気付いた。ちなみに、キイイイインって音はまだ鳴ってる。

「簡単だジジイ。この空間上での音波を少しずらしたただけだ」「なににい！？」

俺が言うと、帝督も続ける。

「ついでに、今から俺たち反撃するから。ちょうどいい、この音波を、テメエみてえなジジイにダメージを与える音波に変えてやるよ」「そんなことができるわけが……」

「普通はな。だが、俺の未元物質にその常識は通用しねえ」「なんだと……未元物質……？」

また俺にバトンタッチ、帝督に続けて俺が口を開く。

「ついでにこの空間から外部に放出される電波の概念断ち切るから、スイッチ切ろうとしても無駄ね？」

「有り得ない！ 理論が合わないぞ！ 空間から放射の“電波”だけを断ち切るなんぞ……」

「できないと思うか？ 残念だが、法則は俺が作り出す^{ルール}」

「法則……まさかお前ら、“法則解析”^{アナリシス}と“未元物質”^{ダイクマター}！？」

ジジイがほざいているが、俺たちは演算の真つ最中。ジジイ、怯えて失禁しやがった。きつたねえなオイ。

「は、はははははは！ お前らそんなことしたら統括理事会から睨まれるぞ！ いいのか！？ ワシのバックは大きいんだ！ 学園都市全体を敵に回すことになるぞ！」

「ごちやごちやうるせえなあ……」

帝督が頭を掻いて言う。さて……準備はいいか？ 帝督。

「」
「」
逆算、終わるぞ「」

@

「おかえりなさい」

戻ってきた俺たちに、微笑んで最愛はそう言った。彼女なりに言葉を選んでいたのかもしれない、自然に出たものかも知れない。でも、俺にとって今一番嬉しい言葉であったことは間違いない。

「ああ、ただいま」

「良かったな、最愛ちゃん。もうここに戻る必要はねえよ」

帝督が最愛に笑いかける。そんな帝督に最愛はぺこりと……深く頭を下げた。

「とにかく、協力ありがとうな、帝督」

「何言ってるんだ？俺たちの活躍だろう？礼を言う立場も、言われる立場もねえ」

「はは、そっか」

笑って二人で、拳を突き合わせた。

そういえば、悪ふざけしたあとはいつもこうしていたな……大成功って。

「そんじゃ、俺は一足先に寮に戻るわ。静那は最愛ちゃんにしっかり生活用品かってやれよ」

「あ、おい！……飛んで帰るとか。人様に見られたらお仕舞いだるメルヘン野郎……」

俺の呟きが聞こえたのか、最愛は横でクスクスと笑っていた。

と、さて。

「帝督に言われたとおり、行くか」

最愛のほうに向き直ると、なにやら彼女は腿に両手を挟んで俺から目を逸らしていた。

……？

「どうした？」

「さつき……統括理事会の人から超連絡があつて……それで……」

統括理事会？ ……ああ。アレイスターさんに頼んだアレか。

「ふ、ふつつか者ですが、よ、よろしくお願いします……」

「それ、お嫁に行く時のセリフじゃね？」

「お、およ、お嫁！？ ……うう、超恥ずかしいです……」

まあ、とりあえず戸籍上は妹になったわけだ。

「これからよろしくな」

「は、はい……」

最愛の可愛らしい微笑みに、つつい俺も感化されて笑みを返した。

「とりあえず、買い物行くか」

ボロボロの自分の服装に気付いたのか、最愛はずかしそうに頷いた。

「は、はい……」

007 ある日の夜

最愛との買い物を終えた俺は、寮の部屋に戻ってきていた。

「さて……とりま晩飯にすつか」

「あの……」

「あん？」

部屋に入って伸びをしている俺の後ろから声がかかる。振り返ると、最愛がなにやらキラキラした目でこちらを見ていた。

ちなみに服装はすでに変わり、可愛らしいフリル付きのミニスカートとブラウスという身軽なものになっている。

あん？ 作業服？ んなもん捨てたわとつくに。

「……どした？」

「私、超料理したいです！」

「……できるなら文句は全くない」

「はい！」

このパターン、ラノベやマンガだとマジでぶっ倒れるようなものを作るやつが出てくるからな。……バカ〇スの姫路さんとか。

喜び勇んでキッチンに飛び込んでいく最愛。冷蔵庫を覗き込んで、何にするか決めているのだろう。

「お、俺も手伝おうか？」

「超結構です！」

「……あ、そう」

嫌な予感しかしないのは、気のせいだと思いたい。

手持ち無沙汰になった俺は、最愛に通わせる小学校を選ぶことにした。

帰り際に聞いた彼女の能力はLEVEL4の^{オフエンスアーマー}窒素装甲……どうやらその能力を研究されていたらしい。

でもまあ、ぶっちゃけLEVEL4もあるのであれば、どの学校でも問題ないだろう……ということで、俺の通う柵川中学近辺に絞って探す。……そういえば。

「最愛？」

「はい！ 超頑張ってます！」

……いや、聞いてないよ。ここまで来たら信用するって。

「じゃなくてさ、今何年生が分かる？」

「はい！ 浪人生です！」

……いや、研究所にずっと居たらそうかもだけどさ……。

「最愛何歳？」

「お、乙女の年齢を「あ」もう面倒臭い！ 小学校に転入させるから年齢教えて！」……あ……そういうことでしたか」

やっと分かってくれたようだ。返答を待つ。

「でも……私なんかまで学校行き始めたら超お金掛かりますよ……？」

フライパンを木へらで叩くような音とともに、最愛の寂しそうな声がする。

「ああ、平気平気。アレイスターさんの計らいで俺、月々5000万貰ってるから」

「桁が超違う!?!」

なんか、俺の能力に対する研究のためと、LEVEL6にしない慰謝料的なものらしい。帝督に言ったら、俺の倍以上じゃねえか! って怒ってた。いや……この半分でもかなり充分なんだけどね。

「だから平気」

「そういうことでしたら……今五年生です」

「ん、了解」

五年生か。まあ、六年生よりは転校も不自然じゃないな。あ、でも前の世界で俺のクラス、六年の冬から転校してきたヤツ居たっけ。さて……「こと、このどっちかで最愛に選ばせよう。」

「超出来ましたあ!」

「……覚悟を決めるか」

「ちよっそれはいくらなんでも超酷い発言だと思います!」

テーブルの上に様々な料理が並ぶ。っていうか……。

「なんか……滅茶苦茶美味そうなんすけど先輩……」

「ふふん! 思い知ったですか!」

全体的に中華風なのは何でか知らないが、すごい。チンジャオロースーにショーロンポー、フカヒレスープに海鮮チャーハン。最愛サン、度重なるご無礼、お許しください。

俺の正面にちょこんと最愛が座り、二人で食事を開始する。

「うまあ！ 何コレうまあ！」

「研究所での唯一の暇つぶしが料理本でしたからね。超舐めないでください！」

「いや……マジでうまいっす最愛サン」

「ふふ……ありがとう」

「！」

満面の笑みの最愛。とてつもなく可愛いんですけど。今日からこの子が妹なんだよな……。

「あ……あの……」

「ん？」

感慨に浸りながらチャーハンをパクパクしていた俺に、最愛が不安げな視線を向けてくる。

「なんて呼べば……いいですか？」

「なんでもいいよ。最愛が好きな呼び方で。っつーか兄妹なんだ。敬語なんざ使わなくていいよ」

「あ、いえそれは私のデフォなんで……」

そう言って照れてから、一息置いて最愛は、俺と目を合わせて笑顔でこう言った。

「お兄ちゃん、でいいですか？」

「ああ、それでいい」

@

「最愛、風呂沸いたから先入って」

「え……いやお兄ちゃん超先でいいですけど」

「いいから入れ」

「ええ……」

とりあえず洗面所に最愛を押し込んだ俺は、ケータイにメールが来ているのに気がついた。

『from てーとく』

text 明日入学式だよ。新入生の集合は9：20だっ
つーから、9：00にお前んとこのチャイム押すわ』

もう明日っから入学式なのか。楽しみだな、学園都市の学校。

『to てーとく』

text ほいほい了解。そういやさ、最愛の料理メチャメチャ
美味いんだわ。30分前にウチ来てさ、三人で飯にしねえ？』

送信つと……。すると、間髪いれずにメールが来る。こいつの返信速度は異常だ。

『from てーとく』

text マジで!? 行く行く! んじゃ、8：30に
行くな……

……あと。お前俺のアドレス帳名の“てーとく”マジやめろ。この前お前のケータイ見た女の子が俺のキャラ誤解してたから
知るか。

「超えましたよ」

湯上りでほんのり上気した最愛がバスタオルを首にかけて出てくる。

「ああ、じゃあ俺入ってくるから、どっちの学校行きたいか決めておいて」

「あ、はい」

パンフレットを受け取った最愛を部屋において、俺は風呂に向かった。

@

最愛は静那が風呂に入ったのを確認すると、パンフレットを眺めて一人憧憬の念を噛み締めていた。

なんと言っても初めて“学校”に通うのだ。正直当然といえば当

然かもしれない。

右の学校は常盤とこひら小学校。名門常盤台中学の系列で、LEVEL2以上の能力者でないと受け付けない。ちなみに女子校である。

左の学校は河瀬かわせ小学校。能力などの縛りはないが、こちらも優秀な能力者を輩出し続ける名門。ちなみに共学。

「……どっちにしようかな。超迷いますね」

いずれにしても学校に行けるので、最愛にしてみれば静那が“こつち”と決めれば何も言わずに従うのだが。

「お兄ちゃんだったらどっちに行きますかね……あ、常盤は女子校か。……む？ お兄ちゃん？」

何か引つ掛かった最愛。実際この時最愛自身は気付いていないが、完全に静那に惹かれていた。そんなわけで、引つ掛かるものを懸命に探していた最愛だったが……。

自分 小五

お兄ちゃん 中一

つまり……

自分 中一

お兄ちゃん 中三

結論。一年間一緒に登校が可能！

引つ掛かりは完全に消えた。

「うん、中高一貫は友達とのふれあいも超少なくなりますしダメですね。そうです、絶対に小学校は単体じゃないとダメなんです。人とのふれあい超大事」

無理やり結論付けて、最愛は河瀬小学校に通うことを決める最愛。

と、そこで静那が風呂から出てきた。

@

最愛がかなり勢いよく「河瀬小学校がいいです!」と言ってきたので吞まれて頷いてしまったが、ふむ。

やっぱり共学ってことは、最愛も男子が気になる年頃なのかね?

『ダメだコイツは……』

「アレイスターさん!？」

……気のせいか。

007 ある日の夜（後書き）

この話書いてて思った。てーとくってタグ入れよ（笑）

現在、最愛はキッチンで鼻歌を歌いつつ朝食の調理の真っ最中。俺は二人分の布団を片付け、制服に腕を通す。学ランつつーオーソドックスな制服は、黒髪の俺には結構合うつと思うしな。と、そんな時にインターホンが鳴った。

てーとくだよ！ 早く開けて！ てーとくだよ！

「はいはい今行きます」

がちや。目の前にはプルプル震えている帝督。

「テンメエ！ どんなインターホンにしてやがる！ 昨日“てーとく” やめろつつつたよなあ！？ 早く開けて！ じゃねえよこの野郎！」

ドアを開けた瞬間、暴言の嵐。うん、サプライズ効果はばっちりだ。

帝督を無視して外に出る俺。帝督は中に入る様子もなく、訝しげに俺の行動を見守る。

さあて！ “ピンポン連打”の時間だぜえ！

てーとくだよ！

くらい美味しい朝食を食った俺と帝督は、そのまま玄関へと向かった。

「いつてらっしやい」

「なんかこういうの見てると、新婚さんみたいだな」

帝督が茶化すと、最愛は一瞬で真っ赤になる。おいおいじめるなよ……。

「そんな……でもお兄ちゃんと……ふふ……でもダメだよそんな……」

「エへへへ……」

「おい、最愛？」

「ふえ！？ あ、超なんでもないです！ ささ、いつてらっしやい」

「！」

「お、おう」

時刻はちょうど9:00ごろ。俺たちは寮をあとにした。

@

「にしても帝督、学ランぴっちり着るのは似合わねえな」

「んな！？ そうか……？」

「ボタンニ、三個外してたほうがお前らしいよ。まあ校則違反だろ
うけど」

帝督が学ランを第一まで締めているのはなんとなく微妙だと思っ
のは俺だけだろうか。

「じゃあまあ、学校着くまでは外しとくか」

「あ、俺もそうしよ」

二人で第二までボタンを外す。うん、帝督はそっちのが似合う。
シャツ出しはダサイからNG。

あれこれ他愛もない話をしながら、繁華街へ入る。通常この時刻
は学校に通っていないければならない時刻なのだ……まあ端的に言
えば不良も居るわけだ。男女関係なく。

たむろしている女子の集団が、俺たちを見ている。嫌な予感がす
るので、俺は厳戒態勢を敷いていた。

「……どうしたんだ静那？」

と、帝督が俺に聞いた瞬間だった。

「ねえ君たちカツコイイねえ」

「お姉さんたちと遊ばない？」

「学校よりもずっと楽しいわよ？」

はい来たはい来た来ると思ったハイ逆ナン！

「帝督！ 悪い俺ちょっとトイレいくから先行って！」

はいBダツシュ！

「あ、ちょ、静那待て！ おい！」

けばいお姉さんに囲まれる帝督。君の犠牲は、無駄にしない！

「おい静那！　どうにかしてくれ~~~~~！」

……ムリ

そのまま学校まで全速力で走った俺。まあぶっちゃけ疲れてない。能力使って酸素の取り入れを最適値に設定したから。

学校の校門を通り、そのまま校舎まで来る。すると、クラス決めの掲示板が貼ってあった。

1 Bか。俺の名前は名前順において異常に早いので、上を見るだけですぐに見つけられる。

今回は出席番号一番か。

「あ！　居た静那！　貴様はこのクラスだったの!?」
「制理か」

二日振りに会ったのは、ホテルの部屋が一緒だった吹寄制理。相変わらず目のやり場に困る体型だな……。

「俺はBだな。皆の名前を今から探そうとしたところ」
「そう。私も今から見るんだけど……貴様はBね……?」

俺もBから順番にメンバーを探すことにする。お！

1 2番 垣根帝督

1 3番 重音里奈

3 1番 吹寄制理

「良かった！　皆同じクラスじゃないか！」

「そ、そうね！ 安心したあ……」
「安心？ そんなに不安だったのか？」
「う、うるさい！ ほら貴様！ クラスに行くわよ！」
「うお！？」

腕を抱え込まれ、そのまま連れ去られるようにして校舎内へと入っていく。女子の制服は一般的なセーラー服だ。
ふむ、制理の髪にはよく似合う。
階段を上っていく。一年の教室は3階のようだ。こりゃ、能力使
つて飛んでいったほうが楽だな。

……？

「にしても、なんか視線が痛いな」

「貴様気付かないの？ 貴様はこの学校で初めての高能力者でしかも序列最強のLEVEL5、おまけにそのルックスよ？ 噂にならないほうがおかしいわよ」

「……ふくん、俺のルックスはそんなに酷いですか」

「はあ！？ ……ああ、垣根が言ってたとおりだわ」

「帝督がどうかしたか？」

「なんでもないわよ！ ……そういえば垣根は？」

「ああ、逆ナンされてた」

「……ま、いいわ。ほら着いたわよ」

「おう」

ガラリと引き戸を開けると、THE・教室！ なんの変哲もない、学園ものでよくあるような暖かい感じのする教室だった。……教室だけは。

「……あつと。この視線はなに？」

ささつ！ とみんな目を背ける。……助けて制理。
そんなニユアンスを込めた視線を制理に向けると、制理は“任せなさい！”とでも言いそうな強い目をこちらに向けたのち、教卓に立って言った。

「注目！」

「……「！？」」「」「」

おおつ、吹寄さん……豪快だねえ。

「隣に居るコイツは確かにLEVEL5で序列零位の最強よ！でも安心しなさい！仲良く一緒に登校してきた私だけど、LEVEL0だから。コイツはLEVELに偏見持っているようなそこら辺の屑じゃないから。……というかまあ、そんなヤツがこの学校来るわけないけどさ」

……制理、優しいな。少し嬉しいよ。そこまで言われると。周りは一瞬驚いたあと、ちらちら視線を送るだけになった。と、制理が俺につつと寄ってきて呟いた。

「貴様からも一言言いなさい」

「マジ？」

「マジ」

……。

「あ、えつと……よろしく？」

全体からほつとした声が漏れた……え？

「普通、高位の能力者は私たちなんかには腰低くしないし、私（LE VELLO）に間違っていないかな？　なんて視線を送ったりしないかな……色んな意味で安心したのよ」
「俺の立場もめんどくさいな……」

そう微笑みあいながら、俺と制理は席につくことにした。どうやら席は適当でいらしい。よって俺は窓側真ん中のベストポジションをゲットした。隣には制理が座る。……あれ？　重音は？

「里奈はまだね……あの子ド天然だし」
「誰がド天然ですかあ」

金髪にセーラー服という、なんとも微妙な格好をした少女がそこにいた。

「おはよう重音」
「おはようございます静那さん、制理さん」
「おはよう里奈」

にっこり笑った重音は、俺の斜め後ろの席に座る。
と、そこで、9：20となった。帝督よ……間に合わなかったか。

「はい、HR始めるぞ〜！」

入ってきたのは“体育教師！”って風貌の男性教師。コイツのせいで地球温暖化が進んでるんじゃないやねえ？

「んじゃまず俺だ！　俺の名前は勝崎大輝^{かつざき だいき}！　24歳だ！　一年間担任を頼まれた！　なんせ……どっかのバカが大暴れしたら抑えられる教師が俺くらいだといわれたからな！」

「なぜ俺を見るんすか……」

心外だ。俺は暴走するような生徒じゃない。

と……そこでなにやら嫌な予感つつか視線がした俺は、黙って俺の近くの窓を大きく開けた。

「静那………?」

「「「「「「???」「」「」「」

俺の行動は皆には分からなかったらしい。まあいいや。3、2、

1……

どごーん！

「到着うっ！」

「翼仕舞え。派手すぎる。つつーかよ、普通遅刻したら前の扉から入ってくるのが基本じゃね？」

「俺の未元物質に、その常識は通用しねえ」

「いや未元物質関係ないだろ……」

窓枠通りぬけて鮮やかな登場を果たしたのは、我らが幼馴染、垣根帝督。

あまりの状況に皆が声を失っていたのだが……。

「おはよう垣根くん」

「おはよう里奈ちゃん」

重音だけはふつつーに対応していた。

その適応能力だけは高く買っておくよ……。

「……垣根帝督！ 遅刻1だはっはっは！」
「先生おかしいだろ！ 帝督の登場についてはスルーかおい！！！」
「俺は派手なのが大好きだ！」
「それでいいのか中学教師iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！」

帝督は何事もなかったかのように俺の後ろの席へと座った。あ、
ここ空席だったんだ。

ツツコミ疲れた俺も力なく座る。……俺か？ 俺が間違ってるの
か？

「大丈夫よ静那……貴様は間違ってるない」

「ありがとう制理……」

親身になってくれる制理に、感動した。あれ？ 目から汗が……。

@

その後入学式を恙無く終わらせた俺たちは、教室に戻って自己紹
介をしていた。

席順に自己紹介をするようで、俺たちの中での順番は制理、重音、
俺、帝督だ。

制理の前の生徒が紹介を終え、制理へと順がまわってきた。ちな
みに言うことは、

名前、出身中学（外部なら外部だけで可）、能力LEVEL、そ

して何か一言だそうだ。

壇上に立った制理は、胸を張って紹介を始めた。ちなみに胸を張った瞬間全ての男子生徒が目を逸らしたのはご愛嬌。

「31番、吹寄制理よ。外部出身でさつきも言ったようにLEVEL L0だけど、そんなものに臆するつもりはないわ。貴様ら、しっかりと私についてきなさい！ まず目標は大覇星祭よ！」

いかつい自己紹介だことで何より……。

制理はそのまま威風堂々と席についた。続いて重音が席を立つ。そのまま壇上へ上り、のんびりと話し始めた。

「13番の、重音里奈です。外部出身です。能力は水流操作のLEVEL2でえ……えっと。よろしくね」

ハイドロハンド

制理の自己紹介で張り詰めた空気が、極限まで抜けた気がする。

風船を解いたくらいの勢いで抜けたなこりゃ。

そのまま順々に自己紹介を終え、俺の番になった。

立ち上がると、なにやら注目されている気がする。理由は制理のお陰で分かったけど、なんだかなあ。

「……静那。大覇星祭についていいなさい」

「なんでだよ」

立ち際に制理が言ったことのために息を吐きつつ、クラスを見渡せる場所に立つ。

うわ、皆見てるよ。

「藍藤。お前と垣根は最後に“なにか質問は？”をつけること！」

「何ですか先生……」

黒板に寄りかかって腕組みしてる勝崎先生に二度目のため息を吐いたあと、俺は口をひらいた。

「1番、藍藤静那だ。外部出身で、アナリーロウ法則解析のLEVEL5。……
ツツ、大覇星祭がんばるー」

制理が睨んでいたので仕方なく言った。

「……ツツ、何か質問は？」

勝崎先生が目をキラキラさせていたので仕方なく言った。
すると、意外にも3つの手が拳がる。

「じゃあ……えつと、古木田さん」

「えつと……アナリーロウ法則解析っていうのは、どんな能力なんですか？」

どんな能力、か。どう説明しようか悩むな。

「難しいこと言ってもいいかな？」

「はい」

「……俺の法則解析は、この世の法則を捻じ曲げる力。重力や抵抗力、圧力や反発力……そしてもちろん電気や素粒子、火炎なども全てだ。例えば炎は酸素を使って燃えるだろ？ その法則を捻じ曲げて、窒素で燃やすこともできるわけだ。それから、相手の能力も捻じ曲げられる。例えば重音の水流操作。この水を操る能力をちょいと弄るだけで、重音は熱湯しか出せずにダメージを負う。簡単に言えば演算を阻害するんだ。……弱点としては、人体に向けて放てないことか。人の居る空間そのものには効果があっても、直接攻撃は出来ないんだ」

「……うう、よく分からないかも」

「ま、そのうち分かるさ……他には？」

「はい」

「えっと……海枝さん」

「その……彼女は居ますか！」

「はい！？」

その質問が飛んだ瞬間、周りから次々と声上がる。

「付き合ったことはありますか！？」

「彼女居るんですか！？」

「好きな女性のタイプは！？」

「どんな年下と年上と同年代、どれがいいですか！？」

え！？ え！？

「誰か助けて……」

「静かにしなさい貴様ら！」

俺の願いが通じたのか、制理が叱咤してくれた。彼女の一喝があれば収まるだろうと思っていたのだが……。

「本妻が怒った！」

「誰がほほ、本妻か！」

「ええ！？ 吹寄さんと付き合ってるんですか！？」

「付き合ってたなどいない！」

「巨乳ですか！？ 巨乳がいいんですか！？」

「悲痛な叫びを飛ばすな！」

「吹寄さんみたいな強気な子がいいんですか！？」

「……／／／」

「フオローしろよ制理！ なんでそこで赤くなる！」

「ああ！ 名前で呼んでる！」

「いゝ！？」

……もう嫌あ。

「はいはい、静那の紹介はここまで。次は俺ね」

かみこうりん

「助かったよ帝督！」

「まあ……いい加減イライラしてたしな」

「？」

俺がそそくさと席に着くと、帝督が壇上に立った。

途端、クラスがもう一度静まりかえる。なんか、「垣根さま……」とか恍惚な声も聞こえるが気にしない。気にしたら負けだ。

70

「12番、垣根帝督だ。静那とは幼馴染でな、幼稚園からずっと一緒だ。学園都市には中学から、つまり俺の学園都市生活は今日から。能力は未元物質のLEVEL5で、序列は今のところ第二位だ。さて、一言つつつてもな……ツツ、大覇星祭がんばろー」

制理が睨んでいた。

「……何か質問は？」

「……彼女居ますか！？」

「……おおう、予測はしていたが」

「彼女は居ない付き合ったこともない現在好きな女性も居ない好きなタイプは分かりあえる子年下年上同年代なんでもオツケー性格は二の次分かり合える可愛らしい子なら良し！！！」

クラスは一瞬で静まりかえった。……帝督さん、師匠と呼ばせてください。

一瞬の間をおいて、おおおおおおおおお！ と盛り上がる。男子生徒からはコロセコールが掛かっているが、本人は気付いていないようだ。

そのまま悠々と帰ってくる帝督、いや、お前はすごいよ。イケメンは死ねば良い。

008 柵川入学（後書き）

なんだか、ギャグ一辺倒になりそうで怖い……

009 映画にGO！（前書き）

これなんてカオス？

009 映画にGO!

柵川中学に入学して、最初の休日。
この一週間は本当にいろいろなことがあった。

4月7日 午前9:00

「遅刻だぞ静那! 急げ!」
「うるせえよ元はといえばお前が朝飯のっそり食ってるからだろ!」
「最愛ちゃんの料理を残せっつーのか teme!」
「遅く食う teme が悪いっつってんだ teme!」
ガララ!
「遅刻だぞ二人とも、がっはっは!」
「だが俺の未元物質にその常識は「バカ言ってるじゃねえよ帝督、座るぞ」おい静那! 今決めゼリフの途中!」
「知るかあ!」

4月7日 午後12:20

「昼飯にすっか、静那」
「そうだな。どこで食う?」
「屋上でいいんじゃない?」
タッタッタ……
「いやあ、屋上の景色は素晴らしい」
「……おい帝督、ここそういえば鍵掛かってなかったか? つか進入禁止じゃ……」

「え？ そ、そうか！？ 変なこと言っなよ制理！」

「そんな嫌がらなくても……」

「いや、嫌なわけじゃ……」

「ザザザ！」

「あん？ なんだテメエら」

「……………リア充には正義の鉄槌をお……！！」「……………」

「……………」

「んな！？ テメエらやる気か！？ ……つて帝督！？ なんでテ

メエが混じってんだ！」

「面白そうだから」

「殺す！ コイツだけ殺す！」

「させると思つか！？ 皆、リア充を潰すんだ！」

「……………おおおおお……！！」「……………」

「くっそ……こうなりやしかたがない」

「何する気だ静那！」

「おい皆！ 帝督は重音と付き合ってるぞ！」

「なにい！？ 静那おま……」

「……………なあにい……？」「……………」

「お、お、覚えてる静那あああああ……！！」

「……………リア充には正義の鉄槌をお！」「……………」

4月9日 午後12:25

「昨日は酷い目にあつた」

「自業自得だ帝督」

「さて、飯でも食つか」

「……………なあ帝督？」

「ん？」

「なんでまた屋上の鍵ぶつ壊してんだ！」

「見晴らしがいいからだ！」
「鍵なら先生に頼み込んで借りりゃいいだろ！」
「許可してくれるとは限らねえ」
「確かにそうだけだよ！ だからっっておかしいだろ！」
「俺の未元物質にその常識は通用しねえ」
「キメ台詞大安売りだな teme！ そして未元物質関係ねえ！」

4月10日 午前10:20

「静那」
「どうした制理」
「その……教科書を友人に貸したままで……」
「ああ見せてやるよ。机寄せるか」
「あ、ありがとう……」
「え、この公式はここがこうでこうなるから結論として答えは」
「……」
「リア充に正義の鉄槌をお！」
「え？ リア充ではないですよ？ 答えは3x……」
「先生気付いて！ いたいけな生徒が一人殺されそうだよ！？」
「む、藍藤くん。授業中は静かに」
「授業中に立ち上がったる生徒が大勢いるんですけどねえ！？」

4月10日 午後15:25

「酷い目にあつた」
「まあまあ。仕方ねえよアレは」
「下校中のため息吐くのは何回目だろうか」
「黄昏てんなよ静那」

「苦笑いしてる時点で理由は分かっているはずですけどね帝督!？」

「そういえば明日は最愛ちゃんとデートだったけ？」

「デートじゃねえよ。映画見に行くって約束を果たすだけだ」

「そうか……女の子と一緒に映画見に行くのか」

「……帝督？」

「だってよ、皆さん」

「……………リア充には正義の鉄槌をお!」「……………」

「みぎやあああああああああああああ!」

「はっはっは! この前のお返しだあ!」

「明らかに俺がやられてる回数が多すぎですけどねえ!?!」

「俺の未元物質にその常識は……もう分かったよチクシヨオオオオオオオオオオオオ!」

「吹寄以外にまだ居たか!」

「許せん! この女の敵は排除するしかない!」

「本音は?」

「……………俺もモテてえよチクシヨオオオオオオオ!

!」「……………」

「ねえ帝督! こいつら明らかに私怨だよ!？」

「今更気付いたか。……なあ静那」

「なんだよ! 助けてくれんのか!？」

「ご愁傷様」

「このクソ野郎オオオオオオオオオオオオオオオオオ!……!」

「……………逃がすかあああああああ!……!」「……………」

「……………」

4月11日、午前8:40

………本当に、いろいろあったな。いろいろと。ていうかほぼ帝督絡みな気がするのはいのせいだろっか……?」

俺は最愛が作った朝食を並べながら、ニヒルな笑みを浮かべていた。

「超たそがれてますねお兄ちゃん」

「ああ……今週はいろいろ有りすぎてな」

「そうですね……学校、怖いところなんですか？」

不安げな表情の最愛。むっ、これはちとまずいかもな。

「違うって。楽しすぎて遊びつかれて、学校のあとはみんなこうなっちゃうのさ……」

「へえ！ 私超楽しみになってきました！」

「そうか。そりや良かったよ。制服はいらなから……映画のあとには最愛の私服選びに行こうか」

「はい！」

昨日帝督に言ったとおり、今日は最愛と約束していた映画を見に行く。B級なのが少し惜しいが、学園都市で製作しているものが大半なのでとにかく安い。おまけにいつでもやっているから問題ない。

「「いただきます」」

「そういえばさ、最愛の始業式は今週の月曜だっけ？」

「そうですね。9：30に職員室に来るようになって超言われました」
「なるほどな。俺と帝督で送るから、時間だけは守るように」

「え？ お兄ちゃん超学校じゃないんですか？」

「どうせ俺たちは授業受けなくても楽勝だしな。特に問題はないさ」
「なんだか……超申し訳ないです」

「いいさ。毎日こんな美味しい食事作ってもらってた。それに、俺も家族として義務があるから」

「……ありがとう」
「おじ」

@

「さて、ここか」
「意外に大きいですね」

映画館前に着いた俺と最愛。人はまばらが入っているようだ。

「良い天気だし、映画よりテーマパークとか行くほうが多いのかもな」
「超始まりそうですよ!」

映画館に入った俺たちは、そのままチケットを買って、シアター前に来る。さつてつと。

「最愛ポップコーン食う?」
「超食べます!」

こりゃ二三個買ってあげたほうがいいか? と思ったあと、最愛の口ぐせが“超”なのを思い出して踏みとどまり、いや、どっちのニュアンスで言ったんだろうと思案した拳句、二人で3つ買うことにした。

ポップコーンのほかに、俺はいつもビンのコーラを買う。カフェイ

ン万歳。大事なシーンの記憶を曖昧にさせないためにも、コイツの存在はかかせない。

「いろいろ規則があるんですね」

「いや、映画を見るときの俺の持論さ。最愛も、映画を良く見るようになったら嫌でも持論を持つようになるよ」

と、俺は苦笑しつつ最愛の頭を撫でた。気持ち良さそうな最愛の顔に一瞬見惚れたのは間違いだ。俺は小学生に欲情するような口リコンじゃない！……帝督はどうなんだろ。

シアターに入ると、既に少々暗くなり始めていた。シアター中央から少し後方の席が空いていたので、そこに座る。

最愛はポップコーン片手に、ずいぶんと機嫌がよさそうだった。

「楽しそうだな、最愛」

「超楽しいです！……お兄ちゃんと初めての……でーと……ですし」

「んにゃ？」

「超超超なんでもありません！」

「そこまですなんでもないことなのか」

「……ところで、タイトルはなんですか？」

「えーっと……SFっぽいな。サイエンスのほうで。いや、魔術を題材にしてるからサイエンスじゃないのか？ いや超科学だからサイエンスでいいのか……とにかくそういう系だ」

「超どういう系か分かりにくいです！」

「……むう。あらずじでは、5万冊の魔術書を持つ少女が教会から逃げ出し、それを助けた学園都市の少年が孤軍奮闘、教会を相手取って戦う物語っつと」

……未来を少なからず当てている気がするの俺だけか……？

「意外と面白そうですね。あ、始まるみたいです」

@

一言で言えば、なんつーか茶番だった。俳優の大根加減が居た堪れない。背景や効果音も粗雑だし、ミュージックがずれていることも多少……うん、B級以前の問題じゃねえか？
でもまあいいかと思うこともある。

「超面白かったです！ あの手汗握る展開！ 続くんですよねアレ！ 超楽しみです！」

と、テンションの高い少女が隣に居るからだ。
なんとというか、連れてきて良かったな。うん。

「お昼食べたら、買い物いくか」

「もう一本見に行きましょう！」

「……マジ？」

その後3本見る羽目になったのは、ご愛嬌で済むことだろうか…

…？

010 御坂美琴（前書き）

さて、
“新キャラ”の時間だぜエ！

日曜日。最愛と一緒に映画に行った翌日である。

今日は俺一人で、最愛の通う予定である学校を見物してきた。一般の学校にしては中々設備も良かったし、学内の設備は恐らく柵川中よりもずっと上だ。

さて、現在は第七学区にてとある自販機の前……。

「うがぁ！　なんで！？　なんでお金出てこないの！？　ジュースも出ないし！　ああもうどうなってんのよこの自販機！」

小学生くらいの女の子が、その前で頭を抱えてクネクネしていた。……独り言（一人叫び？）を聞く限り、自販機に入れたお金が吞まれたということだろう。そりゃ不憫だわ。

「お〜い、大丈夫か？」

「大丈夫じゃないわよ！　ああくそ！」

「こらこら女の子がそんなこと言っんじゃありません」

最近の女子小学生は物騒だな、と身内の妹を思い出しつつ俺は考える。だが、俺がそんな風に思考をめぐらせていると、彼女はいきなり帯電し始めた。

「いいわ……それなら電気で無理やり吐いてもらっただから！」

「ダメだろオイ！」

俺の制止も全く聞かず、自販機に電流を放出する電撃もといビリビリ少女。最近の女子小学生は荒れてるなあ、と俺は身内の妹を思い出しつつ考える。あれ？　デジャヴ？

と。

「やったあ！ いっぱいでてきた！」

「おいおい……」

ガツコンガツコンと景気の良いサービスをする自販機……いちごおでん？ 誰が飲んだこんなの。

ビリビリ少女はいそいそとその全てを拾っているけれど、いや、20個近いぞコレ。

「アンタに少し譲ってあげるわ」

「18個もなんで持てるんだキミは？」

俺は余った黒豆サイダーなるものを二つ貰い、嘆息する。どうやら電気を使ってアルミ缶を浮かせているようなんだが……電気って応用性高いのな。

「にしてもキミ、結構な電気系能力者なんだね」

「ふふん、私はLEVEL3の電撃使い。でも、すぐにLEVEL5になつてやるんだから！」

そう言つて胸を張る女の子は、どこかで見たことあるような……
ああ！ ミサカはミサカはつてうるさい女の子にそっくりだ！ ……
……つてことはこの子……御坂美琴？

「そりゃすごいね。頑張つてな」

「当然よ！ それじゃまたね」

18個もの缶ジュースを持ち歩く姿は異様としか言えなかったが、思わぬ邂逅があったことに苦笑する。

さて、俺も行くか。

「そういえばこの辺、常盤小学校の辺りなんだよな……ちょっと見てくるのもいいかも知れない」

常盤小学校までの道のりは分かっているので、少し歩くこととした。

@

18個の缶ジュースをぶら下げて歩く少女……御坂美琴は、自身の寮に戻るため近道である繁華街を歩いていた。

「さっきの中学生……」

学ランを完全に全開にして、首からネックレスをぶら下げ、おまけに襟足の長い黒髪と。不良少年であることは間違いないのだが、その少年はLEVEL3もの力を持つ電撃を見ても畏怖の一つもしなかった。

同年代や中学一年生程度の人間なら大抵自分を遠ざけるか、あからさまに怯えるかのいずれかなのだが。

「それにしても……はあ」

先ほどは珍しく自分の強い能力に驚かない少年に会い、意外と気分が良かった美琴だが、現在はその気分が駄々下がりになっても良いほどの事件に遭遇している。

「オラあ！ 動くなよ、動くんじゃねえぞお前らあ！」

拳銃を振り回しながら、銀行からずた袋を背負った男が三人出てくる。繁華街に居る人々はみんな手を挙げてフリーズする他なく、その中で美琴は奴らをとっ捕まえるための隙を窺っていた。

……私なら大丈夫。とにかく銃弾に当たらないように、磁力を使って瞬時に近づいて……そのまま奴らを感じさせれば勝ち！

そう思った美琴。計画をたたき出した次の瞬間にはもう、動き出していた。

「あ、キミ危ない！」

後ろから男性の声がしたが、気にしない。瞬間的に近寄った美琴は、三人居る強盗のうち一人に電撃を浴びせて感電させる。

「うぎゃー!？」

LEVEL3もの力を持つてすれば、相手を気絶させることなどたやすい。そのまま他の二人に飛びかかる美琴。

喰らえ！

美琴はそのまま男に触れて電撃を放った……が。

「残念でした」

「なんで!？」

美琴の驚愕の声と同時に、蹴り飛ばされる。周りで手を挙げてい

るだけの連中は、美琴を助けようとしなない。

「……………」

「さっきなんで？ とか聞いたよなあ？ 答えは簡単。俺も電撃使だからだよん」

「……………」

電氣の能力者相手には、よっぽど力差がないと電撃の意味がないことくらい、美琴も知っていた。だからこそ、自分の犯したミスを悔やむ。

「が!？」

「オレも居るんだけど、忘れてもらっちゃったかな？」

後ろから蹴り倒され、そのまま足でのしかかられる。

気絶していた男も起き上がり、美琴を二人で囲み始めた。電撃使の男は、周りに銃口を向けて動けないようにしている。

「このガキ、よくもさつきは……………」

「きゃ！」

腹を蹴られ、悶絶する美琴。目からは涙が溢れてくる。LEVE L3の電撃使といえど、まだまだ小学五年生。

大の大人三人に、能力を封じられた状態で勝てるはずもなかった。

「た……………すけて……………」

「は！ 自分からつつこんで何言ってるやがる。元々、お前以上の能力者はこの中には居ないみたいだしな」

はっはっはと高笑いする男。電撃使いが振り向き、言う。

「おい、そろそろずらかるよん。警備員どもが来たら厄介だから」

「このガキはどうするんで？」

「人質」

「！ 放して！」

電撃使いに引つつかまれ、そのまま連行される美琴。自分の力で解決するどころか、むざむざ人質になったことが美琴にとって一番やるせないことだった。

「助けて！ 誰か！」

周りをなみだ目で見ても、目を逸らすことしかしない群衆に美琴は大きなショックを受ける。見捨てられた、という感情は、小学五年生にとってはとてつもない心傷だろう。

「残念だけど、これが現実だよん」

「嘘よ！ そんな……どうして……？」

涙でぐしゃぐしゃになった美琴だが、それでも助けは現われない。でも……と美琴は一縷の希望をかけて、最後に叫んだ。

「助けて！」

「ん？ この声はさっきのビリビリ小学生か？」

「！」

ほとんど希望をなくした美琴が見たのは、なんとつか間抜けな少年だった。

群衆が全員でハンスアップして固まっているというのに、少年はずっと地図から目を放さずに群衆と自分たちの間を歩いていたのだ。

……マジか、と美琴は思った。

美琴の声が聞こえたらしい少年は、ふと顔を上げてキョトキョトと周りを見たあと、美琴の姿を視認した。

「……なに、してんだ？」

「！」

その声は、さっきのツツコミ気質満載の声とはかけ離れていた。一番その声に殺気を感じたのは美琴だろう。睨む先は、自分を掴んでいる電撃使いの男だった。

「な、なにってそりゃ……うるせえ！ 死ぬ！」

少年の放つ殺気に耐えられなかったのだろう、一瞬で少年に向けて発砲した。

「危ない！」

美琴が叫ぶが、少年は動かない。それどころか、銃弾をつまんだ。

「……なんだあ？ このおもちゃは」

「な！？」

「ぽいつと」

銃弾を可愛らしい効果音付きで捨てた少年は、そのままゆっくりと歩いてくる。全開の学ラン、漆黒で襟足の長い髪。真ん中には綺麗なネックレス。だが、その少年から出ているのは殺気。

「小学生の女の子捕まえて、あまつさえこんななみだ目にさせて、なんだあ？ それが大人のすることかよコラ」

「つく！ 撃つぞ、この女を撃つぞ！？」

「……ああ！？」

「！？」

男が美琴に銃を突きつけた瞬間。美琴はまたも泣きそうになったが、少年は怒りのオーラを倍増させただけであった。

次の瞬間、少年は足元にあった小石を蹴飛ばす。それは消えたと思ったら、男の腕ごと銃を吹き飛ばしていた。

「ぐあああああああ！」

男がしゃがみこんでのたうち始めたと同時に少年は動き出す。

美琴を抱き抱え、そのまま三人の男たちから距離をとったかと思うと、言った。

「銀行強盗は嫌いじゃねえ」

「「「は？」「」「」

一瞬何を言っているのか分からなかったのは、この場に居た全員だろう。だが少年はお構いなしに続けた。

「俺はするのもゴメンだが、お前らはお前らなりに覚悟を決めて飛び込んだんだろうからな。犯罪云々は別として、むしろ色々な意味で尊敬してもいい」

「ちよつと……何を言って」

「だがよお、それを止めに入った小さな女の子は、それ以上の覚悟で飛び込んだんだと思うぜ？ この場合、お前らはこの女の子から尻尾巻いて逃げ出すのが正解だ。したら、俺は無視しただろうしな……」

「……けどよ」

一旦言葉を切って、少年は言った。次の言葉と同時に、男たちには比喩ナシに重圧がのしかかる。

「そんな女の子をいたぶって人質たあ、覚悟もへったくれもねえんじゃねえの？ ああ！？」

「くぐぎゃあああああ！！！！」

「なにを……なにをしているの？」

怯えた美琴は、乾いた口で少年に問いかける。目の前では、目に見えないもので今にも押しつぶされそうな三人組。

「……奴らの居る空間の重力を変えただけ」

「くっそおおおおお！」

美琴に説明をする少年に、電撃使いの電撃が飛来する。だが、少年は一言で片付けた。

「……うぜえ」

「な！？」

飛来した電撃は、蒸発して消えたのだ。

これには群衆はおるか美琴でさえも何がおきたのか分からない。

「驚くことはねえだろうよ。電撃に、沸点つー概念を加えたただだ。ちなみに、40度で蒸発するようにした」

「そんな！？ おかしいだろ！」

悲壮と凄惨を思い切り表情に出す男に、少年は一言だけ言った。

「^{ルル}法則は俺が作り出す」

その瞬間、男たちは押しつぶされた。

数分後、アンチスキル警備員が到着すると、少年は忽然と姿を消した。美琴が繁華街内を搜索しても、見当たらない。

だが、収穫があつた。あの少年の情報で。

アナリーロウ 法則解析

少年の能力だ。この世の常識を変えてしまふ、天界の片鱗を振るう者。つい最近、有名な能力開発施設が何者かに潰された話は知っていた。それは、天界の片鱗を振るう二人の少年によって行われたものだという。

……そして。

『ふふん、私はLEVEL3の電撃使い。でも、すぐにLEVEL5になつてやるんだから！』

『そりゃ凄いな。頑張つてな』

あの少年は、LEVEL5の第零位。学園都市で敵うものナシと言われている無敵の能力者。

……もう一度、会いたい。

恋愛感情ではなく、無敵の能力者に惹かれた少女が、空を眺めた。

その願いは、またも同じ場所で意外とすぐに叶うことだと、彼女は知らない。

011 幕間 重音里奈の一日(前書き)

短編です

011 幕間 重音里奈の一日

おはようございます。重音里奈です。

今日は日曜日。土曜日を午後17:00までずっと寝ちゃって、
休みを満喫することができませんでした……ぐすん。

なので、今日はまったりするぞ〜！

……。

……。

……おー。

私一人しか居ないのを忘れてました……。

じゃあ満喫します。

……どうすると満喫なんだろ。うーん。

制理ちゃんに聞いてみよ〜！ お〜！

………あ、かかった

「もしもし制理ちゃん？」

『里奈？ どうしたの？』

「休みを満喫するって、どうやるんですか？」

『休みを満喫〜？ それより里奈、宿題やったんでしょっね？』

「……あ」

『やっぱり。しっかり勉強しなさい!』

「ねえお願い制理ちゃん見せてくだs」

『ツーーー、ツーーー』

切られてしまいました。仕方がないので、仲良しの他二人に電話してみます。

……あ、掛かった!

『んあ?』

「もしもし帝督くん?」

『お、里奈か。どうした?』

「宿題を見せて欲しいんだけど……」

『宿題? あったつけそんなん』

「うん、入学テスト学年二位の帝督くんなら出来てるかなって……
だめですか?」

『ダメっつーか、やってねえしやるつもりもねえな』

「……え?」

『いや、やる意味ないっしょ、わざわざ家に帰ってまで勉強とか』

「いや、それが学生の本分というか常識というか……」

『俺の未元物質にその常識は通用しねえ』

「ええ……」

帝督君はダメでした。しかたがないのもう一人に……。

……かかった。だんだんテンションが低くなっている重音里奈であります……。

「もしもし?」
『もすもす、ひねもす』
「ひねもす!?!」
『……ふーあーゆー』
「なぜ英語? しかも発音最悪!?!」
『……重音が、どうした』
「あ、いや、宿題を見せてもらいたくて……」
『宿題……? 俺がやってるとでも思ってたのか?』
「そんな当たり前みたいに言わないでください!」
『当たり前前つか常識だ常識! ここ次のテストに出るぞ』
「えええええ!?! ……学年一位は宿題をやらない主義なんですか? どうして一位も二位も……」
『宿題とか……やる意味(笑)』
「自分でかつこ笑いとかわらないでください! ていつか出された課題はやるのが社会のルールでしょうが!」
『^{ルール}法則は俺が作り出す!』
「……もういいです」

「どつやら学年一位と二位は、宿題をやる気すらさらさらないみたいです……」
「ついでに翌々日にあった宿題確認テスト……あの二人は満点でした。ぐすん。」

012 四人のLEVEL5 前編(前書き)

長編というほど長くはないですが、スタートです(笑)

012 四人のLEVEL5 前編

「さて最愛、準備はいいか？」

「超オツケーです！ 学校超楽しみです！」

「さて……帝督がそろそろ来る頃だけど」

ブルルルルルルルルルルル……

「はい、こちら白式。どうしたんだ鈴？」

『年齢も性別も機体も世界ですら違うんだが。そしてそういうメタ発言は私の前以外では絶対にやめるのだな』

「へいへい……で、どうしたんすか？」

『第十学区にあるとある研究所に、厄介な侵入者が入りそうだな。』

急がなくても構わない、今日中に第二位と二人で向かってくれ。地図は後ほど渡す』

「俺、今日は最愛の入学っつー大切な式典があるんだけど……」

『だから今日中で良いと言っている。このシスコンめ』

「んなあ！？ シスコンってのは姉妹に恋愛感情抱いちゃってる危ないやつのことを言うんだぞ！」

『……まあいい。それじゃあ頼む』

「ああ」

ケータイをパタンと閉じると、最愛が今にも泣きそうな顔でたっていた。

「ブラコンも超ダメなんですか……？」

「？」

てってててててーとくだ！ Ya！ てっててててててー

とくだ！ YO！

「はいはい今開けます」

がちや

扉を開けると、帝督が拳をプルプルさせながら立っていた。

「テメエはいい加減懲りろおおおおおお！」

@

最愛が転入する河瀬小学校は、柵川中学とそう遠くないところに存在する。昨日の下見でも雰囲気は良かったし、ここなら最愛も伸び伸びと生活できるだろう。

校門前に到着した最愛は、感嘆の声を漏らしていた。帝督と俺で後ろから苦笑していたのは内緒だ。

職員室へ来い、とのことだったので、最愛を連れて半ば迷子になりながらも職員室へと到着。

担任の名前は“白瀬”と言っらしい。優しそうな女教師であった。少し、若すぎる気もしたが。

「それでは、この子はお預かりしますね」

「よろしく願います。最愛、鍵は持ってるよな？」

「はい！ 持ってますから超安心してください！」

職員室前で、二言三言かわした後、最愛をおいて帝督と一緒に河瀬小学校をあとにした。

そのまま近くのファミレスに入り、禁煙の窓側席を頼む。

「それで、話ってなんだよ静那」

「ああ、そうだったな」

ドリンクバーで取ってきたコーラを一口飲んで、俺はケータイを取り出す。帝督はオレンジとアセロラを一個ずつ……店に迷惑がかかるようなバーの取り方をしているが、それについては触れないでおこう。

ちなみに、アレイスターからは、俺との関係を帝督には伏せて置くように言われている。今は帝督に話す必要性も感じないし、黙っていてもいいか。

「知り合いから頼まれてな。俺たちの伝説第二章でもやろうかと思つて」

「ん？ ……第十学区にある研究所の……侵入者をしとめる、か。殺せつてことか？」

「いや、その辺は適当でいいんじゃないか？ 殺しはあまりしたくないけど、天秤にかけるつてもあるしな」

なるほど、と頷いた帝督は、アセロラドリンクを一气飲みする。

「んで、その侵入者つてのは？」

「え〜っと、お。LEVEL5の第三位、“リフレクション反射防壁”の……にしだ西田止通しとおつてヤツだな」

「LEVEL5か。楽しそうだな！」

「んで……ミッションの敗北条件ってのがあるんだが……」
「なんかゲームみてえだな」

と帝督は笑う。俺が次の言葉を発するまでは。

「一方通行アクセラレータの死亡、または再起不能」

「一方通行!？」

「……なんでも、その研究所でちょうど調整中らしいんだわ。んで、そんな能力の弱まっている第一位を殺してしまおうってのが、先方の考えらしいんだよな」

「……まあ、戦略としちゃ合ってるか」

「好きくないけどな」

「俺もだ」

一瞬にごった空気が、二人の意見の合致でもう一度緩んだ。

013 四人のLEVEL5 中編(前書き)

……いつも思う。俺ダメだ……。

013 四人のLEVEL5 中編

アクセラレータ
一方通行はその頃、調整として一時“ベクトル操作”以外の能力を封じられていた。つまりは、向きを変えることしかできない、ということだ。

調整内容はそのベクトル操作の角度や精度、そして速度である。
第十学区の研究員は一方通行の能力と脳内構造に興味津々であった。

「つつーか、いつまでかかるんですかア？ 天井クウン？」

「ひい！ もう少し、もう少しですよ！」

数人の研究員の指揮を取るのは天井という研究員。4人の研究員を動員して、一方通行の調整を行っていた。
が、その時であった。

『侵入者ヲ発見シマシタ、侵入者ヲ発見シマシタ』

「なにい？ し、調べてこい！」

天井が命じると、そそくさと一人の研究員が入り口のほうへ走っていく。だが。

「ぎゃあ！」

「はいはい、皆さんお待ちかねの止通さんですよ」

「な、ひゃあああ！」

一番最初に逃げ出したのは天井だった。なんせ、調べに行った研究員が一発頭をぶち抜かれて、吹っ飛んで戻ってきたのである。正直、怯えるのは当然かもしれない。

追うように研究員たちは次々と逃げていくが、それを反射防壁はリフレクション

無視していた。

「……やあ一方通行、また会えて嬉しいよ」

「ああ？ テメエか三下。俺は今専ら、俺より強エとか言う第零位のことしか考えちゃいねエンだ。テメエなンざ覚えてねエよ」

赤い髪に長点上機の制服を着た男は、嗤う。

「今の状態で止通さんにケンカ売るつても、大した根性だと思うよ？」

「うるせエ。三下はどこまで行っても三下だア」

「へえ……そう」

赤髪の男……西田止通はこの第一位がひどく気に入らなかった。

いや、もつといえは自分より高位の能力者全てかもしれない。垣根帝督が入学したことで自分は第三位に落ちたわけだし、とにかく高位能力者が気に入らない。

「でもまあ、そんなセリフ吐いてられるのも今のうちだけだと思っただけだね」

そう言って止通は拳を叩き合わせる。……手甲が嵌められていた。それも手首までガツチリ覆うタイプの。

「で？ そんなチャチなグローブでこの俺を殺せるとでも思っているのかア？」

「違っんだよなあ……まあいいや、死ねよ」

瞬間、動き出したのは止通。一方通行はそれをただ突っ立ったまま待ち受けた。鉄拳が一方通行の胸部に激突する。

「なんですかア？ そんなんで俺を殺せるとでも……思ってるのか！？ あア！？」

「うるさいなあ……まあいい。じゃあな」
「ッ！？」

瞬間、拳が爆発した……否、拳と一方通行の胸部の間にあった空間そのものが破裂した。そして、一方通行の反射も効いていない。

「な……」

「驚いてるのか。簡単なことだよ。僕的能力“リフレクション反射障壁”は、障害する物体がない空間であればどこへでも反射の壁を張る事が出来る。それを僕の拳に纏うと、一方通行の反射とぶつかるよね？ あとはそこで起きた衝撃を逃がさないために、周りに反射の膜を張るんだ。すると、僕の拳のせいで圧縮ドカン。もっと簡単に言えば、僕と一方通行の間に風船を挟んだようなものだ。だから……キミの反射も同時に壊した」

「……反射が壊れるだ？ バカなこと言ってンじゃねエよ」

「だから、僕的能力は反射防壁なんだって。反射の壁に関する事なら、キミよりずっと上なんだよ？ というわけで……死んでくれると嬉しいな」

またも止通の拳が唸る。格闘術に長けていない一方通行はガムシヤラに避けてはいるものの、当たった瞬時に爆発のダメージを負うのでは動きも緩慢になってくる。

「クソ野郎……」

「ほらほら、鼻血ぶーたれてそんなこと言っても全然カツコつかな
いって」

「ダメエは死体決定だクソがア！」

一方通行の反撃。運動量のベクトルを止通に向けた一撃は、止通の顔面に向かって突き進む。だが……

「いやあ、愚策っしょ」

反転、止通はその拳に自らの鉄拳をぶつけた。瞬間、一方通行の拳が爆発する。

「がぐああ！」

「なっさけないな、第一位」

「！」

カウンター、とでもいうような止通の逆手が、一方通行の右頬をぶん殴った。そしてまた……。

「おごあ！？」

起爆。余裕そうな止通とは裏腹に、一方通行はやけどと打撲でふらふらだ。

「加速装置アクセラレーターの使えない一方通行アクセラレーターなんぞこんなもんか……。もういや、僕も飽きた」

ため息を吐く止通。だが、一方通行はまだ諦めていない。

「テムエが死ぬんだよ三下ああああああああ！」

「あ？」

止通が首をかしげたのも束の間、一方通行はその場にあった機械

を勢いよく殴りつける。それは一瞬にして熱を帯び、破裂の様相を深めていく。

「な……お前……」

「いくら反射があつたところで、酸素が無くなった地下で生きれるとでも思つてンのか？ 俺は抜け道を知ってるけどなア」

「逃げるつもりか!？」

「違う。生き埋めにするだけだア」

一方通行が言った瞬間、地下研究所は炎で埋め尽くされた。

013 四人のLEVEL5 中編（後書き）

戦闘描写の酷さ……泣

014 四人のLEVEL5 後編

「く……そ……」

酸素欠乏で倒れそうな男が居た。LEVEL5の第三位、反射防壁^{ヨシ}の西田止通である。

なんとか地下から脱出した止通は、研究所外の敷地内から寮に帰ろうとしているところだった。

「……ひとまず、寮に帰らないと。一方通行を殺すのはその後だ……」

ふらふらと、止通は歩く。そのうちに酸素も戻ってきて、だんだんと歩きも安定してきていた。

このあとどう一方通行を殺すかだけを考えていた止通は、向こうから歩いてくる二人組の会話にふと気付いた。

「おいおい帝督、研究所燃えてんじゃん」

「そうだな、一方通行は……こりゃ死んだか？」

二人とも学ランを全開にし、髪も長い。茶髪と黒髪の違いが一番目立つ。顔の造形も、二人とも全く違うがイケメンという部類としては一緒だろう。

「あん？ お前が第三位か？」

黒髪のほづが言う。

「お前らは……？」

「ああ、知り合いの頼みでな……一方通行の居る研究施設に侵入した男を殺せとよ」

「！」

反射的に後方へ飛び下がる止通。こいつらは第三位と知っていて殺しにかかっている。だとすると、なんらかの対策を打たれている可能性が高い。

「つつても、ふらふらじゃねえかコイツ」

「静那、いいから潰して、一方通行の様子でも見に行こう」

「分かった」

「まさか……お前ら」

静那、という名に、止通は気がついた。最近現われた第零位 藍藤静那。そして、いつも一緒に居るのは垣根帝督。こちらも第二位のLEVEL5。

乾いた笑みが、止通の表情を覆う。思えば、大嫌いな高位能力者が全員、自分の周りに集まっている。

「殺すわ……ガキども」

「あゝ、やっぱりお前が侵入者？」

藍藤静那の質問に止通は黙って頷くと、同時に垣根帝督に向かって走り出した。

それを視認した垣根帝督は口角を吊り上げる。

「テメエの能力は、全てを反射する絶対防壁……それを何も無い空間中のどこにでも張れるんだっただな？」

「？」

疑問を抱く西田止通に対し、垣根帝督は背から、大きな三対の翼を現わした。

そのまま少し浮いた垣根帝督は、その翼を振るって言った。

「じゃあその反射防壁、張らせなくしちまうのが一番手っ取り早いな」

「何を!？」

瞬間、垣根帝督の翼を通った光によって、空間が埋め尽くされていく。

「何もない、と思ったはずのところまで溺れる気分はどうだ？」

「もがががが！」

「空気中の塵を集めたただけだ。本当に何もない空間、なんてのはこの世界にほとんどない。ましてやこんな路上で、何もない空間なんてのがあるはずもない。お前の反射防壁は、無意識にその塵どもを避けて展開されてんだ」

「……！」

「なら話は簡単だ。反射防壁を張れないほど、物体で埋め尽くしてしまえばいい」

「くそ……」

「雨水つてよ」

「？」

「一粒の塵を中心に水分が集束したものだっことは知ってるよな? ……お前は塵だ」

「！」

垣根帝督は笑って言った。第三位という塵を使って、空気中の塵、という雨水を集めている。未元物質による光で磁力を持った塵が、

第三位という磁石にひつつく。

「あとはまあ……静那が燃やせば終わりか」

「えぐいことするのな、お前」

呟いた藍藤静那は、そのまま塵の集束している第三位に向けて手をかざした。

「結局殺すのかよ。じゃあな……第三位」

どこからともなく燃え始めた塵は、粉塵爆発の要領で一瞬にして爆発……爆発を利用して襲撃を行った第三位は、爆発によってその生涯を閉じた。

@

『これで第三位を空位に出来た』

「それがそんなに大事だったんスか？」

『いや……』

「まあとにかく一方通行は生きてたらしいし、いいつスよね？」

『ああ。問題ない』

「……知り合いはなんだった？」

「助かったってさ」

現在俺は、帝督と一緒に朝のファミレスへと戻ってきていた。
一方通行は倒れていたものの無事だったらしいし、アレイスター
さんも文句はないと思う。

「にしても、第三位呆気なかった」

ジュゴゴゴとストローの音を鳴らしながら、嘆息したように帝督
は言った。

俺はむしろそれにため息を吐く。

「いいじゃないか。無駄に苦戦したくねえし」

「よくねえよ……伝説ってほど残らねえよコレ？」

「どうも一方通行が相当体力削ったらしいからね……実質第三位に
とっては、上位のLEVEL5と三連戦もいいところだったんじゃないか？」

「……にしてもなあ」

満足のいかなそうな帝督に俺は苦笑した。

015 柵川祭？（前書き）

少し時間が飛びます。

015 柵川祭？

七月にもなると、色々和学校にもなじんでくる。

俺と帝督の存在も最初でこそ騒がれたが、今は見知らぬ人に軽く会釈されるくらいになったと思う……のだけれどさあ。

「学校見学申請の量が尋常じゃないからね……一つキミ達に頼みがあるんだよ」

校長室。俺と帝督は二人並んで革張りのソファに腰掛けていた。

正面には校長先生。俺たちが入学するつつつた時に泣いて喜んでいたら人だ。

「それで……独自の文化祭を決めたわけですか……」

帝督がため息交じりにそう言った。俺は紅茶を手に取りつつ、事態をまとめる。

発端は今月の初めにクラス委員長（制理）が言った一言だった。

「柵川祭っていう文化祭を今月末にやるそうよ」

これである。まず皆ポカンとしたあと、どよめきが一瞬で広がった。

俺と帝督が入学してしまったことで、柵川中学は一躍有名校になってしまったらしい。それで観光会社やら小学校やらからの学校見学の申し込み量が尋常ではなく、ならもういつそ文化祭でもやっつしまえ！ というのが生徒会の出した結論だった、と。

「俺らが悪いのかなあ……」

「天井を仰ぐな静那」

帝督に苦笑されて俺は校長に向き直った。申し訳無さそうな顔をしていることから、俺たちに何かをやらせる気満々なのが窺えて嫌になる。

「……………それで？ 俺たちに何をしろと」

「話が早くて助かるよ。君たちには軽く芝居を打つような感覚で、校庭で勝負をして欲しいんだ」

「周りの観客死にますよ？」

「ナチュラルにそういうことを言うな帝督」

帝督の発言に、ハンカチで額を拭く校長先生。本当に悩んでるんだろうな……………。

とはいえ、俺たちに代案があるかといえはそうでもない。元々俺や帝督の能力は、ただの一般人には理解しにくいだろうし……………帝督のは派手だからそれだけで盛り上がるかも知れないけれど。

それかあとは……………

「校舎を的にすれば派手にもなるけど……………」

「やめる静那。校長先生が涙目だ」

どうすればいいかねえ……………。

「じゃあ、一つ提案があるんだが聞いてくれるか？」

涙を拭いた校長先生が人差し指を出して言った。

「二人で打ち合わせとかして、パフォーマンスをやって見るというのは？」

「パフォーマンス？」

@

「って話になっちゃってさあ」

「パフォーマンスですか……超楽しみではありませんけど」

夕飯の席で、最愛にことの顛末を話してみた。最愛は漬物をポリポリ食べながら、どんなのが良いか考えてくれる。

「やっぱりB級映画にありがちな超アクション系か……」

「あ、シヨーにする気ですか貴女は」

「超良いと思いますよ！ アクション！ 超悪の権化監藤静那をやつつける！ 的な」

「俺って超悪の権化だったんだ……」

軽くシヨックでへこむ。味噌汁を啜りながら、でもアクションシヨーも悪くないかと考える。

「だがそこへ、悪の権化の右腕、垣根帝督が現われて……」

「あ、帝督もこっちサイドなんだ！？」

「垣根帝督の配下には、最愛ちゃんという可愛らしい悪魔が！」

「最愛入ってきちゃった！？」

「校長先生は立ち向かう！」

「ヒーロー校長かよ！」
「じゃあゴレンジャーでも出します？」
「出さねえよ！　なんで俺も帝督も悪なんだよ！　ヒーロー」コテンパンにする自信あるぞオイ！」
「可愛い小学生の女の子だったら？」
「ソッコーでやられてあげましょう！」
「じゃあ私超ヒーローで」
「誘導尋問だったのかよ!？」

でもまあ……帝督にヒーローやらせて、適当に俺が観客攫ってっ
ていうのもいっつか。かなり投げやりだけど。

「花火みたいに超綺麗なのもありですね」
「ああなるほど。パレードみたいな感じね？」
「校長先生打ち上げたり」
「そっち!?　校長打ち上げちゃうの!？」
「帝督さんでも良いけど」
「良いんだ!?　帝督打ち上げていいんだ!？」
「　超嫌がるでしょうし」
「誰だつて超嫌がるだろうよ!！」
「火薬詰め込むの辞めれば承諾してくれるでしょうか？」
「火薬詰め込む気でいたんだ!？」
「でも派手にババーンって超やりたいですよね」
「拳句花火みたいに破裂させる気だったんだ!？」
「夏の風物詩ですから」
「打ち上げ校長が!？」
「校長先生なら悔いなしで打ちあがってくれそうですよね」
「失礼なこと言うな!」
「打ち上げられて派手に臨終なら、校長生活の幕引きにはいいかと」
「嫌だよそんな校長生活!」

……最愛は、いつからこんな黒いキャラに……っっ、お兄ちゃん
泣きそっ。

とにかく、パレード的なのとヒーローショーと。どっちがいいか
明日、帝督に話してみよう。

016 来客（前書き）

お待たせいたしました！

今日は休日である。俺は帝督と待ち合わせをして、喫茶店で打ち合わせていた。

ウィンナーコーヒー片手に、帝督は言う。

「パレード的なのと、ヒーローショーねえ……………」

「どうだろ？」

「いや、どっちも悪くはないんだが……………あ、一応俺もケータイのメモに数個書いといたんだ。ちょっと待て送る」

そそくさとディープレッドのケータイを取り出した帝督。一応俺も黒いケータイを取り出してテーブルの上に置く。

「……………よし、送信」

「来るかな……………」

てーとくだよ！ 早く見て！ ぼくさみしい！

「……………」

空気が痛い。何コレ怖い。帝督の殺気が尋常じゃない。

「お前は昨日の、今日の話のメールもこの音で着信してやがったのか……………？」

「あ……………えと……………YES！ 高須くりにつ「死ね」ぎゃああああああああああああああああああああ！！」

酷いよ帝督……………なんで熱いコーヒーカップを俺の手の甲に押し付

けたりするの？

「……まあいい。いや良くはねえや、さっさと着信音変えておけ。

……んで、どうだ？」

「そうだな……」

帝督の文章の中には、ヒーローショーやパレードもあった。他にも二つくらい……。

「この“校庭を消す”ってのはなんだ？ 悪意を感じるんだけど」

「見たまんまだ。校庭を的にしてしまえば、害はないだろうと思っ
てな」

「地震つて言葉ごと存じない？」

「……たまに辞書に書いてあつたりするな」

視線を逸らす帝督。……さて。

「どじりするよ、コレ」

「……うん」

二人して悩むものの、全くといっていいほどアイデアが出ない。
どうしたものか。

「……誰かが障壁を張れば、俺と帝督のバトルも出来るんだがな」

「第三位のこと言ってるのか？ 俺たちの攻撃を止められるような

やつ、そうそう居ないって」

「……だよなあ」

「まあ来週の今日までに考えればいい話だ。少し考えとこつぜ」

「そだな」

！ 某奈良遷都キャラクターのパクリかコルア！」

「安心しろ、パクったのは向こうだ」

「そついう話じゃねえよ！　そして平然と嘘ついてんじゃねえ！」

「いいじゃねえか魔法少女」

「どついう思考回路してやがる！　頭ン中おかしいだろ！」

「学園都市に弄られたからな……」

「そついう話じゃねえええええええ！」

向こうから、漫才みたいな声が響いてくる。最愛も、よくあんなふざけたインターフォンをスルーできるものだ。

最も、いつ兄がフォンの音声を变えているかには興味があったりするのだが。

「お帰りなさい」

「おう、ただいま！」

言いつつ、奥の部屋へと学ランを片付けに行く静那。後ろを歩く帝督は、最愛に悪戯顔で呟いた。

「ごめんな……愛の巢に邪魔しちゃって」

「ひゃう!?!」

そのまま静那を追いかけて帝督もソファに学ランを投げ捨てる。

後ろの最愛はと言つと……

「お、お兄ちゃんと……愛の巢ってひゃう……うう、でも…超二人きりなんだし愛の巢？　……フフ」

真つ赤な頬に手を当ててクネクネしていた。

すると、いつの間にか台所に居た静那が言う。

「おい、パスタ伸びるぞコレ」

「ああ！ ごめんなさい！」

「いやいいけど……」

そう言いつつ、静那は茹で上がったパスタをざるに上げ、ミートソースの鍋を覗き込む。

「うまそ……最愛皿出して」

「はい！」

最愛が皿を渡し、それを静那が盛り付けていく。テーブルから見えた帝督は、またも悪戯顔で最愛にだけ聞こえるように物質をばら撒いて言った。

「うわー、新婚さんみてえ」

「はひゃうー!？」

「……? どうした最愛？」

「し……しんこ……しんこ……」

振り返ると真っ赤になった最愛が居た、そんな状況に置かれた静那は一瞬怪訝な顔をするが、首を傾げて盛り付けに戻った。

「お新香はパスタにやあわないと思うけど」

「つ~~~~~~~~!!」

「……静那デメエ……」

後ろで顔を隠すようにうづくまる最愛と、ため息と殺気を同時に放つ帝督。……いつたいななんだ、と静那は首を傾げていた。

@

パスタを食べ終えて一時休息を兼ねて紅茶を啜っていた俺たち。
そんな時、インターフォンが鳴った。

T・E・-（ハイフン）・T・O・K・U GO！ YAAAAA
AAAAAAAAAAAAAAAAA！

「はいはい、今あけます〜」

パタパタ駆けていく最愛。のんびり紅茶を啜り続ける俺と、テイ
丨カップをプルプル振るわせる帝督。

おかんとぼくと、時々おとん、的な状態かね？

「……静那、説明してもらおうか」

「……手短かに」

「まず誰が来てもインターフォンはアレなのか!？」

「まあ。気分だな」

「そしてなんでー（ハイフン）なんだよ！ 普通Iだろ!？ それ
だと“帝督”じゃなくて“てーとく”になる…ってソレが狙いかあ
あああああああああ!」

「一人で何言ってるんだ?」

「肩すくめて紅茶飲むとかどれだけバカにしてんだテメエ!」

二人でギヤーギヤー言っている間だけだった。奥のほう……最愛が向かったほうからも、不穏なオーラが漂ってきたからである。

「……なんだ？」

「行くぞ静那」

「おう」

017 逃亡の先で（前書き）

お待たせいたしました。

とある無敵の法則解析の今後について活動報告しておりますので、
参照ください。

では、どうぞ！

017 逃亡の先で

トテトテと、俺と帝督が玄関に行く。するとそこには……

修羅が二人。

oh……

「ohじゃねえよエセアメリカン」

「的確なツツコミありがとう帝督」

さて、気が抜けた点が一つと、緊迫した点が一つ。

まず、気が抜けた点。

来客が、知人だったことだ。吹寄制理……俺のクラスメートである。

次に、緊迫した点。何故か……最愛との間に火花が散っていることだ……。

「何事ですかこれは」

「さあな……お前絡みなのは百パーセントだが」

恐る恐る近づく俺たち。同時に、地を揺るがすような声が聞こえてきた。

「なんで……静那の家に女が居るのかしら……？」

「超直感で私の敵ですねアンタ……」

……本当に何事ですかこれは。

「あ……」

「お兄ちゃんは黙ってて！」

「貴様は黙っていなさい！」

「怖いよ帝督！俺の友達に修羅が憑依してるよう！」

「そのキャラも良く分からねえが……まあとりあえず、制理に上が

ってもらえ」

@

我が家のテーブルは現在、尋常でない殺気に震えていた。これぞまさにてー“ぶる”なんちゃって。

「静那」

「どうした帝督」

「死ぬか？」

「なんで!？」

この雰囲気でもくだらしないことを考えたのが気に障ったらしい俺の正面の方。右手を俺に向けた帝督はため息をついて、「で」と切り出した。

「いい加減、なんか喋れ」

俺の隣に居る最愛と、斜向かいの制理に言った。
なんとというか……二人の睨みあいはずっと続いていた。

「……お兄ちゃんと私の愛の巢に超なんの用ですか？」

「何が愛の巢よ……というかいつから妹が居たのかしら静那？」

ギロリ、と制理の視線がこちらに向く。うえ〜と……。

「入学する少し前？」

「へえ……で？ 愛の巢ってどういうこと？」

「いや、それはただ単に帝督が最愛をからかっているだけ」

「お兄ちゃん！ 私はそんな風には超思ってますん！」

「……だ、そうよ静那」

「うえ〜……」

「昼ドラを見てる気分だな」

「笑顔でサムズアップしてんじゃねえ！」

つく、味方が居ない。というかなんで二人はそんなに怒ってるんだ！？

「今、なんでそんなに怒ってるんだ？ とか思ったでしょ貴様」

「うー！」

「お兄ちゃん？ まさか超本当に分かってないんですか？」

「俺殺されそうだよ助けて帝督！」

正面を向くと、帝督はサムズアップしたまま固まっていた。……

そうか、助けるつもりなんざさらさらないってか。

ならば！ 三十六計逃げるに如かず！

廊下に飛び出し、俺は逃げる！

「ああお兄ちゃん！」

「静那待ちなさいよ貴様！」

「あ、おい俺をこんな修羅場に置き去りにするな！」

知るかっつてんだよチクシヨー！

@

「はあ、はあ……酷い目にあつた」

第七学区が一望できる休憩場所まで逃げてきた俺は、膝に手を付いて呼吸を整えていた。

とにかく……ジュースでも飲もう。

そこにあつた自販機に小銭を入れ……

「うおつとお！」

危ねえ。これは確か御坂が金を呑まれた自販機じゃねえか……。

「喉渴いたなあ……」
「これでいい？」

ぼん、と缶ジュースが飛んでくる。キャッチすると、ヤシの実サイダー、と書いてあった。

「サンキュー……およ？」
「久しぶり……でもないわね」

目の前に居たのは御坂美琴。噂をすれば影、とはよく言ったものだ。

「ビリビリ小学生じゃねえか」
「御坂美琴！　そういえば名乗ってなかったわね。常盤小学校五年生よ」

「ああ、常盤なんだ」

そう言いつつベンチに座ると、少し距離を空けて御坂も座った。彼女の手にも、ヤシの実サイダーが握られている。プシュツと二人で小気味良い音を鳴らし、一口。む。

「これかなり美味しいな」
「でしょ！？　……と」

一瞬キラキラした目を戻し、真面目な顔で俺に向き直る御坂。

「この前はありがとね」
「別に、礼を言われるようなことはしてないさ」
「そう……。それで、アンタの名前知らないんだけど」

「おっと、悪い。俺は藍藤静那。柵川中学の1年生だ」
「柵川……じゃあ近くなのね」

もう一口ヤシの実サイダーを飲んだ御坂は、呟くように言った。

「自慢……とかしないのね」

「自慢？」

「だってアンタ、LEVEL5の第零位なんでしょ？」

「ああ、そういうことか。……お前もLEVELが上がるにつれて分かるようになると思うぜ。あんまりLEVELをひけらかすのも、面白くないって」

「面白くない？」

「だって、高位能力者ってだけで遠ざけるヤツも居るしな。その中に、もしかしたら面白い人間だって居るかもしれないし。出会いを減らすのは寂しいじゃん」

「……分からないけど」

「いずれ分かるさ。お前、LEVEL5になるんだろ？」

「！ うん！」

「なら、いずれな」

ヤシの実サイダーを一気飲みして、俺は立ち上がる。重力で缶を圧縮して、ゴミ箱に捨てた。

そこで、御坂も立ち上がった。

「ねえ藍藤」

「ん？」

「私がLEVEL5になったらさ。一度勝負してよ」

「……分かった。死なない程度にな」

「約束よ！」

走り去っていく御坂。さて、俺も帰るか。

……帰る、しかないのか。修羅場に。

ため息を一つして、晴空を仰いだ。

017 逃亡の先で（後書き）

ヒロイン選考、是非投票ください！

018 柵川祭！（前書き）

沢山の投票ありがとうございます！

まだまだ続くよ……やべえ、一瞬で自己嫌悪に陥った。

ただいまの候補三名。

麦のん

ねーちゃん

みこと

……怖いよ怖いよこのメンツ！

浮気とか見つかったら一瞬で消し炭だよ！

さてさんと五和が次いで追いかけてる形。ほかのみなさんもがんばれ！

入学希望先の中学が、何やら凄く人気になってしまったようなんです。

なんでも、LEVEL5が一気に二人も入学したらしく、そのせいで高位能力者の人たちもこぞって希望するようになってしまったからだとか。うう、益々入る学校が狭まるなあ。

でもそのおかげもあって、その学校では独自の文化祭を開催するようなのよね……。

それが今日。私も一応まだこの学校を諦めたわけじゃないんだし、見に行こうというわけで、校門前までやってきました。にしても……。

「凄い人だなあ」

私の背丈ほどしかない門のはずなのに、大きくアーチが作られています。“ようこそ柵川へ”……デカデカと描かれた文字に一瞬見入っちゃいました。チケット配りの人たちも忙しそうだなあ。まだ九時だというのに溢れんばかりの人が敷地内へと入っていきます。それにしても、私より少し年上のお兄さんお姉さんが多いようです。六年生の先輩たちかな？

来年の中学だもんね……柵川祭は第一回だし、初めて中学校に入る人が多いんじゃないかなあ。

と、私が門を潜る番だ。

……ふえー、美人さんです。綺麗な金髪ウェーブの可愛い人です。

「はい、どうぞ」

「ありがとうございます！」

パンフレットを受け取って、私そのまま潜り抜けようとしたときでした。

「里奈！ あいつら見なかった！？」

今度も美人さんです。すらっとした肢体に、黒いロングのしなやかな髪。お、おっぱいが大きいです。中学生、憧れちゃうなあ。

「ふえ？ えと、あいつらって誰？」

「ああもう！ 静那と垣根よ！」

「えと……私は見てないなあ」

どうやら人探しのようです。黒髪の人は、ため息を吐いてセーラー服を翻しました。一般の方の視線が集まるのも気にしないのか、ツカツカと歩いて校舎のほうへと行ってしまいました。

「まあ気を取り直して！ じー！」

LEVEL5の催し物もあるらしいし、楽しみだな
校舎の前につくと、案内板があります。色々あるみたいだなあ。
とりあえずかたっぱしから回ってみよ！

飲食のお店が多いですね。たこ焼き美味しかったなあ。……ちよ
つとトイレいきたいかも。

というわけで、少しトイレを探すことにします。

「静那あああああああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！」

！？ な、なに！？ 凄い声が聞こえました。結構かっこいい声だったな……。

次の瞬間、廊下向こうの曲がり角から一人の生徒さんらしき人が現れました。壁に張り付きましたね。黒髪ボサボサで、学ランは全開。あれが中学に居るっていう不良かな！

どうやら自分の来た道を伺っているようです。こちらから見てみるとさながらドラマの刑事さんみたいです。アンパンは啜えてないですけど。

と思つたら一瞬で顔をこちらへ引込めました。ドタドタ走ってくる音が、先ほど不良さんが見ていた方から聞こえてきます。

茶髪のモデルみたいな人が角を物凄いスピードでまがってきました。

壁に張り付いてる不良さんには気づいてないみたいです。そのまま走つてあ、足ひっかけられた。こけた。

「ざまア W W W W」

「ぐお……ムカついたぞコルアアアアアアアアアアアアアアアアアア
！」

足を引っかけた不良さんは、全速力でこちらへ……へ？ こっち！？

こっちに向かってくる不良さんと目があいました……あ、かっこいい。ですが……

後ろから鬼の形相でモデルさんみたいな茶髪の人が追いかけてきてるんですが！？

「およ？ おにゃのこだ」

おにゃのこ？

「とりあえずここにいと……危ないよ！」

「ひゃう！？」

はわわわ一瞬で抱きかかえられてしまいました。

お姫様抱っこされちゃってるよ私！

「とりあえず、怖いから後ろは向かないようにしろよ？」

「へ？ 後ろ？」

急にそんなことを言われて、やっぱり見ちゃうのが好奇心。

……みぎゃあああああああああああああ！

三対の翼を生やした茶髪の人が、低空飛行で飛んできます。怖い
！ 怖すぎる！

「な、なんで翼が……！？」

「ああ、見ちゃったか」

「静那あああああああああああああ！」

私たちはそのまま階段を……翔けた。誤字じゃないです、翔けま
した。もうどうなってるのこの人もあの人も！

屋上にまで逃げたところで、どうやら茶髪の方は追いかけるのを
辞めたようです。

「全く、何部屋か逃げれば大丈夫とか、帝督お前は青鬼か」

「……？」

「ああいや、なんでもない。巻き込みまっつて悪かったな」

バツが悪そうな顔で笑い、後頭部を掻くその人。……なんだかとてもさわやか系。

「俺は藍藤静那ってんだ。君は？」

「はひ！ 佐天涙子って言いますです！」

「そか、じゃあ佐天さん、巻き込んだじゃってごめんな。また今度埋め合わせはするから〜！」

「へ……ってここ屋上じゃ！？」

なんとジャンプして飛び降りてしまいました。

その時、バン！ と音がしてさっきの茶髪の人が屋上へと入ってきました。

「静……あれ君はさっき」

「はひ！？」

怖いです怖いです怖いです怖いですう！

「そんなに怖がらなくても平気だよ。巻き込んで悪かった。静那の野郎は？」

「と、飛び降りました！」

「マジか」

下手をすれば命にかかわることなのに、茶髪の人は何んでもないようにそう言ったあと、自分も飛び降りていきました。

「あれ……？ 柵川中学って、こついうところなのかなあ」

なんだか、不安が募ります。

@

ふう、ふう。酷い目にあつた。

制理に問われた遅刻の罪（俺の寝坊が原因）、全部帝督になすりつけたらアイツ、真後ろに居た。笑えね。

なんか女の子巻き添えにしちゃったなあ。ダイジヨブかなあの子。佐天さん、だっけ。原作で絡んできた気もしないではないんだが、何せ10年以上前の知識。覚えてろっつーほうが無理な話だ。

ああ、そういえば今日は柵川祭。クラスでは普通にたこ焼き屋をやっている。制理が黒豆味を作ろうとしてたけど、まあ無理だろ。まずそうだし。

問題は出し物。結局、演武染みた戦いを俺と帝督ですることになったんだが……アイツ本気でかかってくる気がするのは俺だけか？するつと袖を捲つて、時間を確認する。演武は11:00から。

今は10:20だから……まあ、まったりしてたらすぐに時間過ぎちゃうな。

「どうしようかな。暇だし」

「お兄ちゃん、何してるんですか？」

「あん？」

後ろからの声に振り向くと、居たのは我が妹最愛。そういえば、超絶対お兄ちゃんのイベント見に行きます！ とか言ってたっけ。

「時間あるし、散歩と洒落込んだ」

「じゃあ、私もいっしょでいいですか？」

「そだな、行こうか」

華が咲いたような笑みで頷く最愛。うん、やっぱり女の子は笑顔がいいね。

「じゃあ、どこから回ろうか」

11:00AM 校庭にはバリケードが張られ、さながら即席の
コロセウムとなっていた。そこに対峙するは、柵川……ひいては学
園都市トップの能力者二人。第二位 未元物質と、第零位 法則解
析である。

「……ってあの二人だったんですかあ!？」

思わず佐天は叫ぶ。なにせ、さっきまでバカバカしい鬼ごっこに
付き合っていたのだ。その二人がまさか学園都市トップの能力者だ
とは到底思えないだろう。

そんな佐天の声も届かず、コロセウム内では二人が睨みあってい
た。

「演武つっーから手加減しようかとも思っただけだよ」

「ん?」

垣根帝督の突然の口上に、藍藤静那は首をかしげる。

「やっぱ全力でぶつからないと面白くねえ。ここはさ、お互い縛り
をつけての全力ってどうよ?」

「縛り、か。じゃあこういうのはどうだ？ 直接攻撃以外はみとめねえ」

静那の口元が吊り上るのを見て、帝督も笑みを返した。

お互い、了承がいったらしい。

直接攻撃のみ。これはつまり、空気を操る攻撃や、直接見えない攻撃を禁じ手とすることだ。帝督の未元物質も、静那の法則解析も大きく動きを制限される。

「相手に害がないなら、能力の使用はいいんだよな？」

「ああ、帝督が翼で飛ぼうが問題ない」

「よし、わかった。さっきもある。借りは返すぜ静那！」

と、そこへ放送が入る。

『それでは皆様、本日は柵川中学にようこそいらっしやいました。今から本日のメインイベント、LEVEL5二人による演武を始めたと思います！』

会場のどこかそこから、彼ら二人に対する声援が向けられる。

『それでは……開始！』

瞬間、二つの力がぶつかり合った。

@

「……何よ、これ」

御坂美琴は、目の前で行われる演武に目を奪われていた。

将来絶対に倒すべき相手……藍藤静那が今日ここで戦うというから、参考までに見に来た美琴であったが。

「相手は第二位、垣根帝督か……。どうなってるのよこの戦いは」

六枚の翼を展開して、レーザーを駆使しつつ翼での物理攻撃を狙う垣根帝督。

対するは何らかの付与を施したのか、足からブーストをまき散らしつつ空中旋回する藍藤静那。

垣根帝督が渦巻くようなレーザーを繰り出せば、藍藤静那はそれを素手で打消し。

藍藤静那が手のひらから直線状の竜巻を噴射すれば、垣根帝督はそれを翼で弾き飛ばす。

時たま翼と拳で打ち合い、はたまた遠距離から互いに狙撃の応酬。

「先は長いわね……でも、絶対に追いついてみせるんだから！」

目を逸らさず、少しでもこの戦いから何かを盗もうとする美琴の顔は、実に晴れやかだった。

結局、一時間に及ぶ戦いののち、双方疲れたということでも今回は引き分けと相成った。だけれども、観客たちの目に不満はなく。

校長は安堵の笑みを浮かべていたそうだ。打ち上げられないでよかったな、校長。

019 ある日の法則解析（前書き）

この話から、時間が飛び飛びになると思います。

主人公ですが、原作知識がかなりあいまいになってます。そこをご了承ください。

学園都市の第一位、白濁の男一方通行はその日、切れた缶コーヒーを買いに近くのコンビニまで来ていた。

もう既に日も落ち、暗くなった時間帯。黒地に不思議な模様を描いたシャツを着て、彼は店内を一路ドリンクのエリアまで歩いて行った。

店内も夏場にはありがたい涼しさ。ドリンクリーチインの扉を開けるともつと涼しさが体を包む。

だかそれは一般人に限つての話。すべてを反射する能力を持つ彼にとつては、暑いだの涼しいだのといった感覚は無いに等しかった。彼はそのまま手を伸ばし、缶コーヒーを手に取る。左手に持っていたかごに、次々と放り込む。

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

「……あん？」

「ん？」

一方通行が違和感を感じて隣を見ると、同じ年くらいの少年が立っていた。それはいい。一方通行にとつては全く関係ないことだ。だが。

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

一方通行は、すでにコーヒーを取る手を休めている。にもかかわらず。

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

「おいオマエ。なんのつもりだ？」

ガシャン、ガシャン、ガシャン……

少年がなぜ盛んに“びるくる”なる可愛らしい乳性飲料を、一方通行と同じようにかごに放り込んでいた。

一方通行のかごに。

「ん？」

「ん？ じゃねエだろコルア！ なんのマネだつて聞いてンだよ！」

「君のマネ」

「聞いてねエよ！ 俺のかごに何入れてンだよ！」

「びるくる」

「だから聞いてねエよ！ なめてンですかア！？」

「みりやわかるだる舐めてねえ」

「聞いてねえつつつてんだろコルア！！！」

息も荒く一方通行は怒鳴り散らし、対面する少年を改めて睨む。全開にした学ラン、長めの黒髪、そして胸に下げたネックレス。……面識はまるで無い。

「ああ、かご間違えた」

「いやいやいやいや！ おかしいよなア！？」

見れば彼の左手には、空のかご。

「……オマエ、ふざけてンだろ」

「いや、そんなつもりはない。悪かったな」

そう言つて少年は一方通行のかごから次々と缶を抜いていく。…

…「コーヒーを。」

「……ちよつと待てや。オマエ、これじゃ俺がびるくる大好きみてエじゃねエか！」

少年のかごには山のような缶「コーヒー」。一方通行のかごには山のようなびるくる。

「ああ、そうなの？」

「ちげエよ!？」

「今流行なんだよな確か。缶の大人買い」

「はやってんのかよ!！」

自分が勝手にしていたことがいつの間にか流行つてるとは思わなかった一方通行。

「ほら、あそこの女の子も」

「あア？」

目線の先では、ピンクのファンシーなワンピースを着たボブカットの女の子が……ビールの大人買いをしていた。

「ダメだろアレ!！」

「さあ。店員が止めるだろ」

啞然とする一方通行の横を、スキップしながら少女は通り過ぎていく。

「小学生はまだ早いのよ?」

「小学生じゃないのです! れっきとした大人なのですよ!」

少年……藍藤静那が最後に聞いた彼の声は、ソレだったらしい。

「……ヤバい、第一位怖い」

「お前がそんなふざけたマネするからだろ」

「だって帝督が視察して来いって言ったから」

「視察じゃねえだろアレ。ゼツテムカつかれてんぞ」

「じゃあ何か？ 俺は今日死亡フラグを一個立ててきたってことか？」

「まあ、そうなるな」

「マジかよ……偶然見つけたからって絡むのは良くないな」

「当たり前だろ。でもまさか、あんなにコーヒーバカ買ひする奴だ

とは思わなかった」
「それは同意」

019 ある日の法則解析（後書き）

うん、書きたくなってしまった。

反省している。

一方通行ファンの皆様、申し訳ありませんでした。

感想の返信などはまたの機会にさせていただきます。

020 親友との出会い 前編(前書き)

アンケートの方は、次回か次々回に打ち切らせていただきます。
ご協力ありがとうございました。

アンケート、もう一つ出したいと思っておりますのでよろしくお
願いします。

020 親友との出会い 前編

「超特売日超特価超特急です！」

「言ってる意味が分からない！」

朝食を下げたテーブルに、広告を叩きつける最愛サン。今日は日曜日、学校はお休みである。

彼女の視線は、いろんな意味で熱く俺を捉えていた。

「つまり……買って来いと？」

「超正解ですね！ 兄妹の絆は超強いです！」

大仰に頷く最愛だが……え〜。特売日ってアレだろ、元気いっぱいの学生が乱闘になりつつ商品を奪い合う日だろ？

別に金には困ってないし、わざわざ先輩方に混じって大乱闘スマッシュブラ ーズなんてまっぴらゴメン蒙りたい。てゆか最愛が行けばいいじゃんか……。

「えと……別にお金には困ってないんだけど……」

頬を搔いてそう言うと、最愛は憤慨したように言う。

「超違うのです！ もはや超絶と言って言いほどです！ こころですこころ！」

「バシバシテーブルを叩くでない。ついでに自分に痛みが来ないからって能力使うな、テーブルが泣いちゃう」

ちやつちいことに能力を使う我が妹に嘆息しつつ。彼女の指し示す箇所を覗き込む。

なにになに……？

「デカビタG^{ゲンキ}六本パックで250円？ 最愛お前、栄養剤欲しい位の激務でもしてんのか？」

首を傾げると、最愛は大きく溜め息を吐いた。

「お兄ちゃんがここまで超鈍いと、私も超どうしていいか分からないです……」

「？」

最愛は、黙ってそのデカビタGの広告欄、その注意書きらしきものに細かい指を当てた。

そこには何やらビックリマークが多用されたコメントのようなものがあり、どうやら最愛はソレが目当てだったようだ。

「大チャンス！ お買い上げの方先着5名様にはプレゼント！ 西方シネマ一か月フリーパス！！」

「ああ……」

納得。

「わかってくれましたかお兄ちゃん？」

「なんでそんな上からだよ……」

つまりは映画館のフリーパスが欲しいんだろ。俺が一回連れてつてからというもの、休日は大体映画めぐりに出かけてたからなあ。でも、フリーパス欲しいって……お小遣い増やしてあげようかな。

自分の至らなさに少しため息。まあいいさ。そういうことであれ
ば。

「じゃあ、俺が買ってくるよ」

「本当ですか！？　ありがとうございます！　小学生の私にはさすがに超きつくて」

「まあ、それはしょうが無いから……。あすこのタイムセールは、戦争だ」

順番待ちなんてものは存在しない、ただの武力勝負。セール中はルールなんてものは何もない。火炎が、雷撃が、濁流が。マーケットを飛び回る。

そんなところに最愛を放り込めないしな。とりあえず、俺が行くしかないだろ。

……戦場か。スーパーで特売品のためだけに戦う。なんかの物語であつたな。

考えてみれば、俺の大好きな“バカなこと”じゃねえか。

そのために本気になる。面白い。

「あすこのスーパー、何時からだっけ？」

「10:00開店だったと思います。お兄ちゃん、超良い笑顔ですけど」

若干、楽しみになってきた俺が居た。

じさせるのだが……。

そんなときである。上条当麻の目の前に、もう一人少年が立ちふさがったのは。

「そのウニ頭！ それを俺に渡せば無事で済むぞ！」

「本当ですか！？ それは助かります……って危ねえ！ これ渡したら意味ねえ！」

危うく手渡すところだった六本パツクを抱きかかえる上条当麻。彼にとつて、この栄養剤は命綱にも等しかったからである。

度重なる不幸に立ち向かうため、栄養剤は必須。……今回も不幸体質が災いして最後の一個を友人と奪い合ったばかりなのだ。絶対に渡せない。

その光景を見た目の前の茶髪の少年は舌打ちする。

「なら、仕方ねえ」

「ひい！？」

いきなり勢いよく三対の翼が生える。上条当麻は腰が抜けるのをやつとのこと堪えた。

「な、なななな……」

「おい帝督！ なんのつもりだコルア！」

と、後方から先ほどの野菜爆撃機もとい、ボサ頭の少年が追いついてくる。

上条当麻は前後から挟まれた形になった。もう、帰りたいです。割と本気でそう思ったのを、前後の少年達は知るはずもなく。

「フツ、俺も栄養剤が欲しいんだ」

「嘘こけ！ お前ほど栄養が満ち足りたヤツをしらねえよ！」
「お前こそ、毎月5000万だったっけか？ 研究費貰ってんだろ
うが静那」

なんとなく、この世の理不尽を痛感した上条当麻であった。

「俺は最愛にフリーパスをあげる約束してきてんだ！ 早くそれを
寄越せウニ頭あああああああ！」
「みぎやあああああああ！」

ほうれん草、にんにく、玉ねぎ、小松菜……ありとあらゆる野菜
が飛来する。

「オラオラいつまで避けてられるかな！？ なんならドリアンと納
豆も操んぞコラア！」

それは本気でやめて！ と上条当麻は思った。
と、その瞬間。

「甘いな……喰らえ！」
「うわあああ！」

正面の茶髪の少年が、翼からレーザーを繰り出す。

「不幸だあああああああああああああああ！」

堪らず脇道に逸れて上条当麻は逃げ出した。

「「逃がすかあ！」」

@

なんとか逃げ延びた上条当麻が、先に出会ったのは垣根帝督であった。

保存食売り場の間道を抜けたところで、ニヤリと笑って立っていたのである。

「もう勘弁してください！」

「じゃあソレを寄越せ」

「なんでそんなにこれが欲しいんですか!？」

「別に、それが欲しいんじゃないよ」

「は？」

一瞬思考がフリーズする。

「え、と？」

「いや、ただ単に俺がソレをゲットして、静那がゲットできない。その優越感に浸るだけ」

「最低だこの人」

「てゆか楽しんだよ。アイツ貶めんのが」

「友人なんじゃないんですか！？」

「親友だな」

「言葉の意味分かって言ってます！？」

「もちろん」

「概念がトチ狂つてるとしか思えない」

「だから寄越せ」

「いやいやいやいや接続詞の使い方が甚だしくおかしいでしょ！」

「交渉決裂だな。奪い取る」

ここまで理不尽な会話をしたことがあっただろうか。

上条当麻はそう自分に問いかけた。

「不幸だあああ！」

「あ、待てコルア！」

そのまま、また死角をうまく使って逃げ延びることに成功した上条当麻は、今日何度目かの不幸に出くわすことになる。

021 親友との出会い 後編(前書き)

次回、アンケート結果発表!

ここでアンケートのほうは打ち切ります! 投票くださった皆様、

ありがとうございました!!

021 親友との出会い 後編

上条当麻はスーパー内のトイレに隠れていた。胸に掻き抱くようにデカビタG六本パツクを抱えながら。

「な、なんでこんな不幸なことに……」

がつくりと頂垂れながら、上条当麻は盛大なため息を吐く。なまじ最近不幸なことがなかったこともあり、そのフィードバックではないのかと、むしろ最近の幸福続きの日々を呪っていた。

「上条さんはあんな化け物と戦う勇氣はありません……」

思い出すのは、天使の翼と二エンジン型爆撃機N・45。ふと、右手を見つめる。

もしかすると、これがあれば逃げ遂せるのではないかと。

「よし」

そう決意して便座から立ち上がり、扉を開けた上条当麻の前には

……

「welcome」

「不幸だ……」

ボサボサ黒髪の二エンジン爆撃野郎、藍藤静那が笑顔で立っていた。

「さあデカビタGを渡せえ！」

「他当たってくれえ！」

勢いよくトイレから飛び出した上条当麻は、涙ながらに台詞を吐く。

だが、今度は彼にも対抗手段が見つかった。右手に宿る幻想殺し（イマジンプレイカー）である。

次に攻撃が来たらその右手で受け止め、能力を消されたことに相手が啞然としているうちに逃げようと、そう心に決めていた。

その時である。ちょうど、藍藤静那が叫んだのは。

「もうじれつたい！ 俺はフリーパスを愛妹にプレゼントしてやらなきゃいけないんだ！ 喰らえ！」

「かかったな！」

爆撃が来ると分かっていた当麻は振り向き、飛来物に右手をかざした。そして……。

べちゃー！

「……不幸だ」

「え？ ああ……その、なんだ。すまん。避けると思って」

納豆が。納豆が上条当麻の幻想殺し（イマジンプレイカー）に纏わりついていた。

まさか納豆を右手で受け止めたりはしないだろうと思っていた藍藤静那も、バツが悪そうに頭を掻いて謝罪する。

「不幸過ぎる……」

「でも、お前能力者か？ 俺の納豆型爆撃機N・45を受け止めるなんて」

「なんでもN・45なんですか!？」

「どうやって受け止めたんだ？ 本当なら今頃右手は蜂の巣なんだが」

「スルー！？ っていうか納豆怖！ どんな威力の納豆ですか！？」
「だから納豆“型”の爆撃機にしてたんだって」

「いやいやいやいや殺す気満々！？ ……というかさっきなんて？
フリーパス？」

一通り納豆型爆撃機の恐ろしさを痛感したところで、ふと湧いた疑問に上条当麻は首を傾げる。

お互いいつの間にか足を止め、険悪なムードは消え去っていた。

「ん？ フリーパスつつつたらフリーパスだろ。それ買ったら貰えるヤツ」

「え？ そうなの？」

知らなかったとばかりにキョトンとする上条当麻に、もしかして、と藍藤静那は口を開く。

「本気で、250円のデカビタG狙い？」

「もちろん。フリーパスなんて知らなかった」

いつの間にか敬語もなくなり、お互いにフランクになる二人。

瞬間、藍藤静那は笑い出した。少し、驚く上条当麻。

「ティハハハ！ いやぁワリィワリィ。まさか本気で栄養剤を求める中学生が居ると思わなくてさあ」

「フリーパス目当てだと踏んでいた、と。それじゃあお前はフリーパス狙いになるのか？」

「そうだな。もし良ければ……共闘といこうじゃねえか」

「交渉成立、かな」

二人して、笑いあう。先ほどまで戦っていた相手だという感覚はほとんど残っていなかった。

「俺は藍藤静那。柵中の一年だ」

「わかった。俺は上条当麻。同じく中学一年だよ」

「！…………おう、よろしくな。だがまあとりあえず……………」
「？」

首を傾げる上条当麻に、藍藤静那は笑って言った。

「手、洗って来い」

「不幸だ……………」

@

いやあ、まさか今まで追い回していたのがあの上条当麻だな。原作知識はかなり薄れているものの、主人公の名前くらいは憶えてるわい。

髪、ツンツンしてたなあ。

それはともかく、今はフリーパスを手に入れることが先決だ。

デカビタGは今まで通り、当麻がもっている。俺は護衛をしつつ、会計コーナーまで当麻を送ればミッションクリアだ。

「いいか、当麻」

「なんだよ静那」

隣でデカビタGを大事そうに抱えている当麻に対して、俺は作戦を説明する。

「まず、俺たちが最も注意すべき敵は間違いなくたった一人だ。垣根帝督」

「垣根……帝督？　もしかして、さっき静那と一緒に俺を挟み撃ちにした天使野郎か？」

頭の上に電球を創った当麻に、俺は頷く。アイツが何者かを、教えておかないとまずいしな。

「いいか？　あいつは実は、学園都市に10人といない」
「まさか!？」

思いついたのか、当麻も驚く。俺の真剣な表情に、当麻もシリア

スに染まっっていく。

「魔法少女だ」

「マジで!?!」

「ああ、厳しい相手だ」

「いやいやいやいや上条さんは初耳ですよ!?! 学園都市に10人くらい魔法少女居るの!?! ていうかアイツ男だろ!?!」

「世に名高い魔法少女てーとくんとは……ヤツのことだ」

「それも初耳ですが!?! シリアスに見えて実はめちゃくちゃ遊んでますよね藍藤さん!?!」

「ヤツは背中から三対の翼を展開し」

「お、おう。それはそうだった」

「頂点にハートの付いたステッキを自在に操る」

「うわぁ……オエ」

「……オエ」

「静那も気持ち悪くなってるじゃねえか! 何がしたいんだよホントに!?!」

「ノリだ」

「ノリい!?!」

散々に当麻を振り回して遊んでいたその時だった。背中を、悪寒が奔ったのは。

「ヤバい、当麻避ける!」

「んなぁ!?!」

左右に跳んだ俺たち。今まで居たところはレーザーで消し飛んでいた。

「静那テメエ……黙って聞いてれば言いたい放題!」

修羅の形相の帝督が、俺をにらみつけていた。
防御力が下がった。

「出た！ さっきの！」

「ああ？ テメエもだ！ さつさとデカビタを寄越せ！」

そうやって三対の翼を出現させる帝督。当麻は少々腰が抜けてい
るらしい。

「て、帝督？ いつから聞いてたんだ？」

恐る恐る俺は聞いてみる。

「『世に名高い魔法少女てーとくんとはヤツのことだ』からだか？
血の海に沈む覚悟はできてんだらうな？」

うっわー、完全にからかつてる部分からやん。
と、隣に居た当麻が唇を震わせながら言葉を紡ぐ。

「そ、それほどの能力……やっぱりお前は」

その言葉に、帝督は何やら満足そうに頷いた。

「そう、俺が学園都市に10人といない」

「魔法少女（LEVEL5）てーとくん（垣根帝督）……あん
だと？」

「ぶっ」

こwwれwwはww

やべえ、腹が痛くて止まらねえ！ 確かに俺は結局LEVEL5
だとは言ってるねえが。当麻、お前マジで信じちゃってたのかよ。そ
のせいで帝督怒りゲージバンバン跳ね上がったるし！

当麻は一層の怒りを向けてくる帝督にどうしていいか分からない
様子。

「静那！ なんかブチ切れてますけどこの正義の味方！」

「落ち着け当麻！ まだハート型のステッキは出していなゲエ！？」

帝督の神速のとび蹴りが腹に刺さる。ちょ、マジで痛い！

「ムカついた。静那、テメエはゼツテエ許さねえ」

「いや、待つて……当麻！ 俺を置いて先に行け！」

もはや怒りで何も見えていない帝督を前に、俺は言う。

「ちょっと静那！？ それは死亡フラグ！」

「いいんだ。俺の命なんかより……最愛の笑顔のほうを俺は選ぶ」

「フラグ重ね掛けてどうすんだよ！」

「行け！ 今度……パーツと焼肉でも食いにいこうぜ」

「終わった！？ ここまで死亡フラグ連発する人初めてみた！」

「来い帝督！ 俺はそう簡単には死なないぜ？」

「まだ言う！？ そんだけ死亡フラグ立ててまだ言う！？」

「……じゃあな、当麻」

「死んだー！ー！？」

当麻に向けていた視線を帝督に戻し、俺は、突貫した。

@

「今日見に行った映画は超凄かったですよ！ 超死亡フラグを立てまくった主人公が、結局病院で生きてたっていう超ふざけたオチだったんですけど〜」
「それ、入院してる俺に言っちゃおう？」

022 本日は晴天です（前書き）

今回小話です。

投稿次第、活動報告で法則解析の今後2を上げますので、ご覧頂けたら幸いです。

アンケート結果はあとがきでどうぞ！

022 本日は晴天です

最愛は今日、入院中の兄に許可を取って友人を家に招き入れていた。

自作のクッキーと紅茶を振る舞い、二人仲良くおしゃべり中だ。

「クッキー、凄く美味しいじゃない」

「超自信作ですから！ 後でお兄ちゃんにも持っていきます！」

クッキーをパクつくのは、茶色い髪を短く纏めた常盤小学校の少女。

その対面の席に座るのは、言わずと知れたブラコン娘、最愛ちゃんである。

「お兄ちゃん……ねえ。アンタみたいなLEVEL4のお兄ちゃんは、さぞかし苦労してるでしょうね」

「自分だってLEVEL4じゃないですか御坂」

遠い目をする少女は、御坂美琴である。実際今日最愛が家に彼女を招き入れた理由も、LEVEL4への昇進祝いだったりするのだ。皮肉半分お祝い半分、と言った感じに、最愛は美琴に向かって口を尖らせた。

「ありがと。にしても私たちの歳でLEVEL4だとさあ……なんかこう、居辛くない？ 学校」

「そうですね？ ウチの学校は超そんなことお構いなしなので」

「いーなー、ソレ。なんか皆よそよそしくてさ」

愚痴る美琴に最愛は首を傾げる。ついでにクッキーを口に入れ、

お兄ちゃんの反応に思いを馳せ始めた。

「フフ……これならお兄ちゃんも……これからも毎日俺のために……とか！ キヤー！ 超恥ずかしいですけど超うれいす！ お兄ちゃん！ 私はもう……！」
「……うわ」

突如変貌を遂げた目の前の友人に、若干引き気味の美琴。これ以上の変態が自分にまわりつくなど、知る由もなかったためなのは知らないが。

そんな美琴を余所にトリップから一向に戻ってこない最愛。あきれた彼女は弱電流を最愛に流し始めた。

「兄妹で禁断の恋を……血が繋がってないからいいんだよ……なんて超カツコいいですお兄ちゃんってぎゃああああ！」

「……アンタも大概の変態よねえ」
「超何するんですか!?!」

恍惚から若干抜け出せていない最愛は、抗議の迫力もほとんどない。美琴は分かった分かったとばかりに手で払うと、もう一つクツキーを口に放り込んだ。

「お兄ちゃんと仲良いのは分かったわよ。ケンカとかはしないの?」
「? しないです。超するわけないです! あ、でもお兄ちゃんに叱られるのには超興味が……」

変態だ。そう思った美琴であった。

「あゝ、じゃなくて。戦ったらどうなるのかなあなんて」

「……ああ。そういうことでしたか。御坂は超戦闘狂でしたからね。」

能力名それにしたらどうかってくらいですよ。超戦闘狂」
バトルジャンキー

完全に茶化した視線を向ける最愛に、美琴はプルプル震えながら帯電し始めた。

最近の美琴の相手は、なんといつてもその目の前に居る最愛なのである。小学校同士の交流で知り合った二人は、両校唯一のLEVEL4同士として模擬戦闘をやらされたのだった。

バトルジャンキー美琴はそこで最愛の実力を認め、こうして仲良くなっている。

一通り美琴の帯電が済んだところを見計らって、最愛は「まあ、」と切り出した。

「お兄ちゃんと戦うのは超まだまだだと思いますよ」

「？ そんな強いのか？ ならやっぱ勝負を挑むしか……！」

「あ……別に超止めたりしませんけど……せめてLEVEL5まで上り詰めてからのほうが」

「いやよ！ LEVEL5になったら、真っ先に挑む相手は決まってるんだから！ アイツには……絶対！」

拳を握りしめる美琴に、最愛は首を傾げるが。

「まあ、どうせお兄ちゃんはすぐその中学なんですから。いつでも超会えますよ」

「なら、またこの家にお邪魔するわ」

美琴は不敵な笑みを浮かべる。と、その時であった。

「テートック！ 君に決めた！」 パアン！ 「かつきねー！！！」

「……え？」

「はいはい今開けます〜〜〜！」

トテトテと玄関へ走っていく最愛。啞然とする美琴。

美琴の耳がおかしくなければ、今でもたまに見る携帯獣のアニメに、この学園都市の第二位が介入するように聞こえたのだが。そして、普通携帯獣は自分の名前しか言わないと思うのだが……ん？ ならいいのか？ てことは今主人公は携帯獣のフルネームを言わなかったってこと？ え？ ええ〜？ などと混乱していた。

と、玄関のほうから声が聞こえてきた。

「アンの野郎はどこに居るんだああああ！」

「てーとくんのせいで超入院中です」

「最愛までてーとくんと呼ぶなああああああ！」

怒鳴り散らしながら入ってきたのは、先ほどまで携帯獣の世界に介入していた第二位だった。

「え！？ 第二位！？」

「あん？ ……最愛、友達か？」

腰を抜かさんばかりの美琴を一瞥した帝督は、最愛を振り返る。

「はい。友人の御坂です」

「御坂チャン、ね。俺は垣根帝督ってんだ。よろしくな」

「っ！？」

初対面の自己紹介でウインクまでかます男、垣根帝督。それに対して美琴は、言いようのない感覚に襲われた。

(え？ いやカッコいいし凄く似合ってるけど……今のインターホンのネタにされてた人でしょ？ え〜？ キャ、キャラがつかめないよ〜)

……某最愛の兄のせいで、帝督のキャラ崩壊が始まっていた。

戸惑う美琴に疑問符を浮かべた帝督は、クルリと踵を返して言う。

「最愛だけなら夕飯ご相伴あずかるうと思っただけど、友達が居たらアレだから俺行くわ。あの野郎のところに行くてくる。んじゃな」
「あ、ごめんなさい。超送りますよ」

嵐のような登退場だった第二位に、若干空気が掴めない美琴であった。

窓の外を眺めていた。ぶっちゃけ検査入院もいいところだったし、もう全治はしてる。退院の手続きも終わったので、冥土返しの名を持つ医者に礼を言つて夜には寮に帰るつもりでいた。

時刻はもう昼を過ぎて少し経つただろうか。西日が目に染みる。ベッドから上半身だけ起こした状態で、のほほんとお茶を啜っていた。

……うん、啜つて“いた”。

なぜ、窓からメルヘン野郎が突っ込んできたんだろう。
緑茶を大量に噴出してしまったではないか。

「いよう、静那」

「飛び込んできてその挨拶はあんまりじゃないか帝督？」

「テメエ……入院期間伸ばされたいらしいな」

「ちょ、言ってる意味が分からなきゃあああああああああああああああああ！」

「インターホンのアレをやめると何度言ったら貴様はあああああああああああああ！」

022 本日は晴天です（後書き）

アンケート発表です！

先に言っておきますと、吹寄さんと最愛ちゃんは確定事項ですの
で。

それを踏まえた上で、集計結果！

一位	御坂美琴	23票
二位	麦野沈利	19票
二位	佐天涙子	19票

まさかの科学サイド一色。

え〜……魔術側のストーリーどうしょ。やるけど。

というわけで、アンケートありがとうございます！

次のアンケートもご協力お願いします！

023 とある決意の未元物質（前書き）

時系列……ぶっ飛ばせ！

023 とある決意の未元物質

時が経つのは早いもので、柵川中学の三年になった。実感は正直あまり湧いていないのだが、否応なしに俺たちの肩書は変わっていく。

吐くと白く蒸発する息が、もう冬だと悟らせていた。今は、とある路地裏に居た。

「つたく。この手のバカは尽きねえな」

「ム力ついた。殺さねえだけ有難いと思えよ」

「……不幸だ」

周囲には、むさ苦しい野郎どもが情けない姿で伸びている。

俺たちがLEVEL5“だから”俺と帝督にケンカを吹っかけてきたのだ。ぶつちやけ自業自得と諦めてほしい。

ま、当麻は納得いかないみたいだけどな。

「お前ら……能力ひけらかすのは良くないと思うぜ？」

「正当防衛だろ。むしろ当麻みたいに態々このバカどもを庇うほうが分からねえって」

ため息を吐く当麻に、帝督があきれる。

「ま、俺は当麻のやり方好きだけどさ」

「！？ならここまでギツタンギツタンにすることないだろ！？」

「それはなあ……アソコまで罵倒されたら俺みたいなヤツは我慢が利かなくなるからね」

「……そうですか」

がつくりと頂垂れる当麻を後目に、俺と帝督は路地を出る。当然当麻も後から着いてきた。

何の気なしにケータイを開くと着信が一件。最愛が、夕飯作って待ってますなんてハートマーク付きで送ってきた。……可愛い。兄バカだと思いつつも、笑みがこぼれてしまう。

「二人ともウチ来るか？ 最愛が飯作って待ってくれてるって」「待ってましたあ！ 最愛ちゃんの料理は素晴らしい！」
「不肖上条当麻、ご相伴に預らせていただきます」

とのことで、三人並んで歩く。学校外ではもう既に俺たちは“いづメン”になっていた。

今日も三人で遊びに行った帰りなのだ。ビリヤード行って、ボウリングやって、カラオケ行って。

三人は親友とも呼べる仲になっている。……少なくとも俺はそう信じている。

俺たちと当麻はデザインこそ違えど同じ学ラン姿だ。遊び帰りの学生よろしく、商店街のおばちゃんたちも微笑ましく見守ってくれている。

なんだかんだで一年間、変わらない光景である。
楽しい、毎日だ。

「そいじゃ腹減ったから俺さっさと帰るわ」

「え！？」

「ばいびー」

ニヤリと笑って俺は竜巻を利用し空を飛ぶ。目指すは自宅！ 待ってる最愛と夕飯！

「待てコルア！」

「あ、帝督まで！ LEVEL0の俺を置いていくなああああ！」

後ろから、翼を生やした帝督が追っかけてくる。そんな俺たちを見上げて走る当麻……あ、コケた。

うん、なんか、ピクンみたいだ。俺たちもうオニオンで飛び立ちました。

当麻ピ ミンおいていかれました。

これでチャッピー的なのが来たらおしまいだな……まあ居ないけど。

「ほら、行くぞ」

「静那さん！ あんたは俺の恩人だ……って待って首根っこ掴んで飛ばれたら絞まる絞まる絞まる絞まるうううう！」

「ハハハ！ 当麻お前散々だな！」

「帝督！？ 笑ってないで助けて!?!」

大驚的みたいなノリで当麻を拾い上げると、帝督が横で笑っていた。

第七学区は空から見ると、いつもとてもきれいです。

@

「超遅いです！」

「ごめんごめん。当麻が足遅くてさあ」

「そーそー、走ってきたんだけど当麻が遅くて」

「嘘つくなよお前ら！？ 飛んできたから俺まだ首痛いんですけど
！？」

鍵を開けて我が家に入ると、そこには柵中のセーラー服を着た最愛が、エプロンつけておたまを持って、頬を膨らませていた。何この可愛い生き物。

帝督と当麻を連れだつて、俺は最愛の背を押しながらリビングへと入る。と、そこには、オコタの上で湯気を立ち上らせる大きな鍋があつた。

「今日は鍋ですか最愛さん！」

「フフン、上条は超分かつてるみたいですね！ これは私が超頑張つて作ったお鍋です！ …… お兄ちゃんのために超頑張ったんだ」

「早く食べようぜ静那！」

「てーとくん！？ 私が今超必死で…つてコラ何一人で超よそつてるんですか！？ ちよ、うどんはまだ入れないつもりなんですけどー！！」

「まあそう怒るなつて。つーかてーとくんて呼ぶな。うどんが無い鍋など鍋ではないわ！」

「ちよつと待った帝督！ 上条さんは思うのです！ うどんは鍋が佳境に入った時に入れてこそ至上だと！」

ぎゃーぎゃー騒ぎつつ、みんなオコタへとモソモソ入っていく。
テメエら、手洗ったのかよ。

うどんを入れる入れないで当麻と帝督がリアルファイトを始める。
その際に最愛はもめごとの種であったうどんを片付けてしまった。

「ったく、静かにできねえのかよ……おお、又ク又クだな」

「超沢山ありますから、さっさと食べましょう」

俺がオコタに入ると、右隣で最愛が微笑む。左隣の当麻と対面の
帝督も、火種のうどんがどこかへ消えたのでおとなしくなっていた。

「んじゃ、お腹もすいたし食べようか」

@

「ロン」

「ぎゃあああああああ！」

俺が牌を全部倒すと、振り込んだ当麻が頭を抱えてクネクネし始める。

それを笑う最愛に、ニヤニヤしながら指折り俺の役を数える帝督。

「……これは跳ねたな」

「いやあああああ！ 上条さんはもう黒いのが一本しか残ってないのです！」

「リーチ棒すら出せねえのかよ」

和やかな雰囲気ですら今まで麻雀を楽しんでいたのだが、当麻が破産したので終幕となった。

いやあ、オコタだと楽に麻雀できるね。やいのやいのしてる内に、帝督の背後に見えるベランダに白いものが舞っているのに気が付いた。

「雪……降ってんぞ」

「マジ!?!」

がばつと振り向く帝督。当麻もクネクネをやめ、窓に目をやった。最愛も然り、雪を見てつぶやく。

「超綺麗です……」

と、少し雰囲気浸っていた時のことだった。

帝督が俺のほうを振り向く。その目には、何やら茶化す空気は見当たらなかった。

「……どうした？ 帝督」
「ああ。実はさ」

何やらマジなトーンの帝督に、当麻と最愛も外から視線をこちらに移す。

「高校……第七学区を出ようと思ってる」

「あ？」

「俺と静那と同じところに行くって言ってなかったか？」

……何言ってるんだ？

当麻が慌てて帝督に聞くと、アイツは当麻に頷いて、俺に向き直る。

「ちようどいい機会だから、言っておきたかった。俺は、長点上機から推薦をもらってる」

「……あの長点上機から？」

「ああ」

長点上機学園と言えば、学園都市屈指の名門校だ。俺と当麻が行こうとしてる近くの公立なんかとは次元が違う。

帝督が推薦をもらっていたなど、俺にとっても初耳だ。なんで、黙ってた？

「ちょっと待てよ！ 俺たちと一緒に行くって言ったよな！？ 約束をたがえるのかよ！？」

「落ち着け当麻。……詳しく話してくれんだろ？ 帝督」

帝督は首を縦に振り、口を開いた。

「俺は、もつと強くなりてえんだ」

「そのために、あのエリート校に行くってことか？」

「……………ああ」

「強くなるためって……………そんな理由で、俺たちと離れるっていうのかよ」

「当麻、勘違いしないでほしい。学校が違うだけで、俺たち三人の縁が切れるわけじゃないさ」

優しいな笑みを浮かべて当麻を諭す帝督。最愛にも顔を向ける。

「だから、最愛ちゃんとの縁も切れないよ。俺も静那と一緒に……………ずつと最愛の兄貴分だ。もつとも、最愛にとっては静那のが大事かもしれないけど」

「そんなこと超えるわけじゃないじゃないですか。でも……………そうすると引越しちゃうってことですか？」

思案気味の最愛。小首を傾げる彼女に、帝督は複雑そうに笑って肯定した。

「十七学区に引越すことになると思う。だから、来年からはもう毎日最愛ちゃんの料理にありつくことは出来そうにないな」

「……………超嫌ですよ」

「……………ごめんな」

うつすらと涙を浮かべる最愛。今生の別れってわけじゃねえけど……………な。

「お前……………もう固まってんのか？ 気持ちには」

俺が問いかけると、帝督は遠くを見る目で、言う。

「思えばさ、生まれてこの方ずっと、静那とはいっしょだった。でも俺が何かで勝ったこと、一度でもあったかよ？」

「ちょ、何を言い出すんだよ帝督！俺と出会った時は、アレは遊びだったかもしれないけど、静那のこと病院送りにしてたよな！？」

「……ねえな」

「ちよつと静那！？」

腕組みをして、目を閉じる。思えば、真剣勝負になった時はいつも、引き分けか俺の勝ちだった。

「……俺は、お前に勝ちたいんだ。どんな形でも」

「そうか……」

帝督の目は本気だった。俺に勝つ。それが、アイツの目標なんだと。

なら俺は、それを迎え撃つのが役目なんだろうな。親友としても、好敵手としても。

数分に至っただろうか。俺と帝督は視線をぶつけあっていた。当麻と最愛はその間、何も言わなかった。

ふ、と。俺はそこで口元を緩めた。

「つつつても、まだ三か月も先の話だろ？」

「……そうだな。まだ三か月あるな」

帝督は長点上機に行く。俺に勝つために。

俺はそれを迎えるべく、当麻と一緒に公立校に行く。それは、今決定事項になった。

「とりあえず、お前ら今日は泊まっていけよ。外寒いし、明日は休

みだろ？」

「そうすつか。ねみいしな。もう十一時だ」

「じゃあお言葉に甘えて」

「……でしたら私はお風呂に入ってきます。少しさっぱりしたくなりました」

「わかった。んじゃ適当に布団敷いておく」

最愛は緩慢にオコタから出ると、パタパタと洗面所のほうへ歩いていった。

「最愛ちゃんのお風呂………?」

「テートクコロスゾ?」

「落ち着いて静那！ オコタが浮いてる！」

@

さわさわと心地のいいシャワーを浴びつつ、最愛は帝督のことを考えていた。

静那と一緒に自分を助けてくれた恩人にして、初めての友人でもある。そんな人が目の前から消えるという経験をまだ、彼女はしたことがなかった。

「超寂しいです……」

シャワーを止め、入浴剤の入った白色の湯船へと足を突っ込む。

素肌に巻いたバスタオルが、どんどん沈んでいった。

肩まで浸かると、最愛は天井を見上げる。

「なんで、お兄ちゃんは超平気そうなのでしょうか」

自分の中で、親のように大きい存在にまでなっていた、垣根帝督。静那に抱く感情とはまた別の、理由のない愛情が最愛の中で渦巻いていた。

そんな人が、急に自分の前から居なくなるという。まだまだ精神的に幼い彼女には、少し辛い出来事であった。

「人間としての“まともさ”は、既にあそこに置いてきたつもりだったんですけどね……」

人を殺すにも躊躇しないくらいには、異常になっていた自分。

そんな自分が、ただ一人の人間が目の前から居なくなるだけで締め付けられたような痛みを感じていることに、不思議な気持ちを感じていた。

「別に、今生の別れってわけでもないのに」

嘆息して彼女は、とっぷりと顔まで湯船に突っ込んだ。

「なあ静那」

「ああん？」

「…………いや。ありがとな」

シャワーの音が聞こえなくなって十分くらいか。静那がダウンを羽織ってベランダに出たのを見て、俺も外に出ることにした。

冷蔵庫にあったコーヒーを能力で温め、片方を静那に投げ渡す。

「…………礼を言われるようなことはしてねえし、実際帝督も感謝なんざしてねえだろ？」

「…………どうだろうな」

感謝、か。してるつもりだったが……………そういわれると分からない。ホント、どうだろうな。

「俺たちの間に、礼を言う言わないなんつー関係はないだろ。こういうことに限ってさ」

カシュツとプルタブを引き、一口飲む静那。甘！？とか言ってるが気にしない。

「甘！？」

「……帝督テメエ。俺の無視したくせして同じリアクションたあど
ういう了見だよ」
「うるせ」

これ甘いな……微糖じゃねえよ絶対。まあいいや。

「……確かに、そうかもな。礼を言うような間柄じゃねえからか、
俺も感謝なんざしてねえ気がしてきたよ」

「水臭えな。……今回の件もよ」

「ワリイとは思ってる。だけど……俺の決意だったんだ」

「決意、か」

静那はつぶやくと、夜空を見上げた。ほう、と吐いた息が白い。

「なんつーか。もつとさつさとえって思った」

「はあ？俺も悩んだんだぜ？お前らと一緒に行くのか、強くな
ろうか」

「願望は後者だったんだろ？らしくねえな、そんなんでお前が悩
むなんて」

「……まあな」

お前とは、ずっと一緒だったしな。それこそ、生まれてこの方1
5年。ずっと。

そりゃ悩むさ。まだまだ一緒にバカやりたかったし、こんなこと
になるなんて思わなかったんだからよ。

「先方には、もう返事したのか？」

「これからする。今日の雪見て決意したんだからな」

「そっか……」

カッと静那はコーヒーを飲み干した。そして、俺のほうに向きなおる。

「思えばいろいろあったけどよ。俺よりずっと強くなるんだろ？」

俺は待つてるぜ？」

「学園都市第零位を抜くには、それ相応の時間が必要だろうけどな」

苦笑する俺に、静那は拳を突きだした。

「お前の未元物質に、常識は通用しねえんだろ？」

…… 八八！

「そうだったな！」

その拳に、俺は自分の拳を一発ぶつけた。

…… 帝督が長点上機に行くって知って、俺は少々気が動転していた。確かにアイツは高能力者。なんせLEVEL5の中でも上の上。俺なんか本来は一緒に居られないような人間だと思う。いや、そう

いえば静那もか。今更だけどなんなんたる俺の友人関係。

不幸体質が災いして、ほとんど友人と呼べる人間が居なかった俺。そこにひよっこり現れたのが、あの二人だった。

LEVEL5の最高峰だつて聞いた時は正直ホント驚いたけど、今では気の置けない親友にまでなっていた。

「それがまさか、引越すなんてな」

ふと、呟く。右手を眺めると、コイツのせいなんじゃないか、なんて気もしてくるくらいだ。

オコタに寝つ転がって一人、ため息を吐いた。

「ふう、ダメだな、俺」

「何がダメなんですか？」

「最愛ちゃん」

ふと視線を上げると、覗き込むように最愛ちゃんの顔があった。

ほんのり上気した顔がエロい！

てゆか。パジャマ可愛すぎないでせうか。

携帯獣のアニメに出てくる電気タイプのモ コミたいな愛くるしさ。ホント、あったかそうな白いフリースの寝巻が似合ってる。

「いや……ちゃんと帝督を送り出せない自分が嫌だったただだよ」

「……そうでしたか。超分かる気がします」

「最愛ちゃん？」

ふと、目を伏せる最愛ちゃん。俺たち三人の癒しになつて居る彼女が寂しそうな顔をするのは、あまり見ないから少し驚く。

「あの二人と一緒に居ると、なんだかいつも少し置いていかれてる

気がしてさみしい時もあるんですよ。今日も超そんな感じでした。なんだか二人だけが分かり合える、そんな超強い絆の空間」

「……………」
「超置いていかれてる気がして。でも、お風呂で少し思ったんです。顔を上げた最愛ちゃんは、にっこりと笑っていた。何一つの陰りもなく。」

「だったら、さっさと二人のところまで登ろうって。超頑張れば、私にだってできるはずです。もちろん、上条にも」

「……………そう、だな」

「なんだか、最愛ちゃんと考えてたことが一緒でおかしかった。そうだよな、あの二人はLEVELなんて関係なく、強い絆で結ばれてる。だったら俺だって、そうなればいいだけのことじゃねえか。」

「なんか、すっきりしたよ。ありがと最愛ちゃん」

「いえ。私も超すっきりしてますから」

「そう最愛ちゃんが笑った時だった。」

「当麻ア……………うちの最愛に何手えだしてんだ？」

「え！？ そんなことないですよ！？ 上条さんはただ話をしていただけでってぎゃああああ！ ミカンぶつけられただけなのにどうしてこんなに痛いんですかあ！？」

「ミカンの質を上げたから」

「え、ちょ、洒落にならないって！」

「うちの妹を手にかけるたあいい度胸だなフラグメイカー！」

「何そのあだ名！？ ってああもう！ 不幸だあああああ！」

まあこうやってバカやってると、悩みなんか吹っ飛ばげどさ。

「15年……か」

早いな、時の流れは。いつかは確かに、こうやって帝督と離れることも分かっていただけだ。

いや……まだ離れたわけじゃないか。連絡先が変わるわけでも、ましてや死んだわけでもない。いつでも会うから、いつでも会えるに変わったただけだ。むしろその方がいいのかもしれないな。

「雪が、綺麗だな……」

さつき帝督が居た頃には止んでいた雪が、また降り始めた。

「これが本当のスタートなのかもしれないな。うつすらとしか思い出せない“とある魔術の禁書目録”……むしろ、これからが俺にとっての始まりだ」

024 郵便局にて、強盗と相対す（前書き）

今回、視点がブツブツ切れれます。ご容赦を。

024 郵便局にて、強盗と相対す

翌日である。

休日である今日は、昨日より一段と朝が寒かった。泊まった二人もオコタから一切出てこないし。

「お前もだろ」

「YEAH」

というわけですね。俺もオコタから抜けることは一切ないです。

ゆいーっ……

「超超超寒いですう……はい、朝ごはんです。超適当ですけど超妥協してくださいー!」

ドン、とオコタの上に鍋を置くと、そそくさと潜り込んできた。冷た!? 最愛の足冷た!?

「……ほああ」

「幸せそうで何よりです」

蕩けた最愛に苦笑しつつ、俺は鍋を覗き込む。

「昨日の残りにごはん入れて煮ただけのおかゆもどきです」
「……まあ美味いからいいか」

おかゆのにおいに釣られて、上半身だけオコタから出す上条垣根

組。

そんな感じで、午前10時45分。藍藤家の朝食は始まるのだっ
た。

「寒い」

「寒い」

「寒い」

「でも決定事項です」

夕飯の食材が無いらしい。誰が買い出しに行くか、で揉めていた。さすがに最愛のためにも夕飯がカップ麺なんつーのは避けたいし、でもデリバリー取るのも大して変わらないし……。

当麻の「お前ら能力使って寒さ無効とか出来ないのかよ」発言に、俺たちは萎えていた。

なんせ演算ずつとしろってことですからね。自動で反射オートができる第一位とは違って、研究されまくってたわけじゃないですから自分ら。

「じゃんけん……か」

帝督がつぶやき、三人でにらみ合う。当然、こんな寒い中最愛を一人放り出そうなんて考えるヤツは居ないからな。

「ハン！ テメエらがこの学園都市最強に適うかな？」

「じゃんけん最強とか超ないですから」

俺が嘲笑を浮かべて二人を見下すと。

「俺に常識は通用しねえぜ？」

「最低限じゃんけんのルールは守ってくださいね？」

手をぶらぶらさせて、帝督が凄み。

「幻想殺しの出番だぜ……！」

「それじゃんけんに超関係ないですから」

当麻は握りしめた拳を前に突き出した。

……最愛についてはみんな、ガンスルー。

「いくぜ？」

「「最初はグー！ じゃんけん ホイ！！！」」

俺はその右手を最大限にまで開く、聖天のパー。

幻想殺し上条当麻も同じく、その異能を解放するべく手のひらを
広げ。

唯一、帝督は頑強な拳……グーを繰り出した。

……つてなんだこの茶番染みたナレーション。

まあなんだ。つまるところ……

「「いよっしやあああああああ！！！」」

「そ、そんな……」

俺と当麻は勝ち抜けてことだ。

@

「寒いんだよチキシヨウ……」

一人、凍えながらネックウオーマーをしつつごちていた。
右手には、ネギと大根の入ったビニール袋。

「なんで、俺まで？」

「知るかよ」

帝督が負けたはずだった。なのに。

「てーとくん、明日の朝食分も超買ってきて欲しいです」

「はあ！？ ……いいこと思いついた」

「なんですか？」

「なあ最愛。夕飯はともかく、朝食を頼むのってなんだか凄く親密な気がしないか？」

「そ、そうですね？」

「ああそうだ。そこで。もし朝食分を静那に頼んだとしたらだ。例えば道端で静那が友人に出会ったとしよう。どこに行くのか尋ねられるんだ。するとどうなると思う？ 朴念仁のアイツは、何も考えずにこう言うに違いない。「最愛に朝食買ってこいって言われてな……っつてな」

「……それがどうなるんですか？」

「最愛を妹と知らない人間が聞いたら、どう思うだろうな。女の子に作って貰う食事のために、買いに出てると思うに違いない。しかも、夕飯ならまだしも朝食だ。つまり……その最愛という女の子は、泊まりに来てまで甲斐甲斐しく静那の世話を焼く、お嫁さんだと思われるわけだ。悪くて彼女だな」

「……！！」

「わかったか？」

「お兄ちゃん！ てーとくんと一緒に行ってきてください！」

「ああ！？」

「なんつー暴論吐きやがる」

「俺も心の中では、ねーよって思ってたが？」

「その前にガッツポーズしてただろう？ 心の中で」

「何言ってた？ ガッツポーズは体で取ってたぞ？」

「この野郎！」

「やんのか!？」

……つたく。それにしても、最愛のノリの良さには呆れるものがあるな。なんでそんなに外に行かせたいんだ俺を。

まあいいや。後は何を買えばいいんだ……？

「あ、帝督。悪いけど郵便局寄っていいか？」

「あん？　なんでだ？」

「いや、金を下ろしたくてな……」

俺たちは近くの郵便局へと向かうことにした。

@

「……こつちは特に異常なしつと。次いきましょー」
「何故わたくしに任せられるのは裏方の雑用や先輩同伴のパトロールばかりなんですか？」

木枯れた寒空の下、メガネをかけた女性が次世代型端末を弄りながらそういうと、年端もいかない少女は納得いかない表情でその女性を見つめた。

少女の目には、その年に見合わない強い意志が見え隠れしており、そんな少女に女性 固法美偉は苦笑しながら口を開いた。

「座学・実技・能力判定すべてにおいて成績優秀な自分が、半人前扱いされるのが不満なのね？」

「……」

ドビシ！ とばかりに少女 白井黒子は固まった。

「そ、そういうわけではありませんが……やはりわたくしがまだ小学生だからかと」

「フ……年齢だけが問題じゃないわ。貴女の場合は、もう少し周りを頼って貰わないと危なっかしいのよ」

「……やっぱり子供扱いされていますの」

頭を撫でられた黒子は、無然としてため息を吐いた。

そんなことはいざ知らず。固法美偉は背を向けて、郵便局への階段を上る。

「それに春から中学生なんだから、ついでに第七学区の中を見て回っていていいでしょ？」

「……」

自動扉を通り抜け、二人はそのまま郵便局内を見渡しつつ巡回に戻る。

特に規制などはかけず、ごく自然な形でのパトロールだ。

と、そこへ白井の見知った顔が局内へと入ってきた。

「「あ」「

白井さん、偶然ですね」

「う、初春？ なぜ貴女がこんなところに？」

「もうすぐ中学生になるし、学校や寮の下見に来たんです」

頭にそのまま活花をしたような前衛的ファッションの少女、初春飾利は笑顔で彼女にこたえる。

「中学生？ どなたがのですの？」

「へ？ ……わたしに決まってるじゃないですかー。やだなーもー」

「へ……へー。………お、同年でしたの………」

てつきり目の前の少女を二つか三つは年下だと思っていた白井だったが、さすがに面と向かってそんなことを言うような無粋ではない。

と、そんな白井に初春は、そういえば、と切り出した。

「白井さんはもうどこに行くか決まってるんですか？」

「え、ええ。わたくしは常盤台中学というところへ………」

「え？」

「？」

一瞬茫然とした初春に、白井は首を傾げる。初春はまだまだ理解のいかないようで……

「トキワダイって、あの常盤台ですか？」

「ええと、学園都市に同じ名前の学校はありませんからたぶんそれかと」

「……ふええええええええ。凄いですねえ」

「そ、そうですよ？」

純粹無垢な憧憬のまなざし。それを受けた白井は若干頬を染めたものの……。

「まあ実際綺麗事ばかりの学校ではなさそうですね。初春が憧れるようなお嬢様な一面もあるとは思いますが……何やら生徒間で派閥なんてものを作っているらしく、世間知らずの金持ちでその上高能力者の集まり。自分が特別だと思っているような歪んだ方たちが集まっただけもおおかしくありませんわ」

「はあ……」

少々夢の崩れた初春は、白井のあまりにも辛辣な羅列に言葉を失うも。白井のトークは止まらない。自分がパトロール中だということとは気づいているのだろうか。

「中でも『超電磁砲』などと呼ばれるLEVEL5がいるらしいのですが、きつとコーマンチキでいけ好かない性悪女に決まっていますの」

「知らない人のことをよくそこまで言えますね……」

ため息まで混じり始めた初春に、今度は逆に白井が質問を返した。

「ところで、初春はどここの学校に？」

「ああ、私は柵川中学というところに。名門とまでは言いませんが、

最近少し有名だと思いますよ?」

「柵川く? ああ、思い出しましたの。確か最強のLEVEL5が通ってる学校でしたわね」

嫌そうな顔をする白井に、初春は笑顔で頷く。

「はい! 第二位の未元物質ダイクマターと、第零位の法則解析アナリーロウの最強コンビ! 彼らが通う柵川はもはや最高峰の名門になるのではないか!? なんて言われてます!」

「そういえば聞いたことがありますの…… “柵川の公式チート” なんて言われてる二人組じゃありませんこと?」
「確か……そうですね」

頷く初春に、白井は盛大なため息を吐いた。

「白井さん?」

「いえ…… 現在第七学区で起きる事件の5割強…… それはなんだかご存知ですか? 風紀委員志望の初春飾利さん?」

「え? そ、それは?」

「……はあ」

「またも大きなため息を吐き、白井は知らないんですの? と上目使いで初春を睨む。」

「 “柵川の公式チート” によるスキルアウトや能力者の駆逐。それもすべて正当防衛がまかり通っているのですから性質が悪い。挑みかかってくる学生を、次から次へとちぎっては投げ、ちぎっては投げ! …… “俺の未元物質に常識は通用しねえ” “法則ルールは俺が作り出す” …… むやみにルールを作って報告書の数を増やすのだけは勘弁して欲しいですわ……」

「へえ……大変そうですね」

灰になったような拉がれた表情の白井に、初春は同情の言葉を向けた。

「その、二つの言葉はなんなんですか？」

「ああ、その二人の決め台詞のようですよ。全く、中学三年にもなつて厨二病とは……子供ですよ」

「でも楽しそうでいいですね！ 少なくとも、コーマンチキよりは」

「……学園都市最強には、少し自覚を持ってもらいたいのですけどね。まだ性悪のほうがいい気がしますよ」

ふう、と一息吐いて、白井は続けた。

「それで、初春は何をしにここへ？」

「ああ、帰りの電車賃がなくなってしまって、お金をおろしにきたんですよ」

忘れてた、と言って初春はそそくさと人ごみに紛れて行った。

「と、いけませんの。わたくしもパトロールの途中でしたわ」

強盗が現れたのは、その数分後のことだった。

@

拳銃を振り回して威嚇する、ニット帽の男。声が震えていることから、初犯か、慣れてないのか……いずれにしても。

「訓練通りにやれば……！」

白井黒子は突貫し、いとも簡単に体術を決めてその男を気絶させることに成功した。

「なんだ、簡単ではありませんの……！」

言い知れぬ昂揚感に浸っていた白井を現実に引き戻したのは、A T M付近に居た男の言葉。

ナイフを突きつけられている少女は、自分もよく知る風紀委員志望の少女……初春飾利であった。

「ッチ、ガキにのされやがって」

「……！」

この時になつて失態を自覚する白井。先ほどの行動、あれは上司でもある固法美偉からは許可されなかった、単独での突貫。アンチスキルに連絡し、じっくりと外堀を埋めていけばこんな事態にはならなかったのだ。だが、今更後悔しても遅い。現状をどう打破するか。それを考えていかなければならなかった。

(どうにかして捕まえないと)

白井はそう考えていた。コートの男は、初春にナイフを突きつけたまましゃべる。

「風紀委員か？ 他にも居るなら出てこい」

硬直している白井の隣に、固法が立つ。それを見て、男は人数を把握した。

「二人か……仕方ないな」

そう言つて、男は白井を見据える。

「そのバッグの中に工具が入ってる。それでATMを取り壊せ」

確かに、先ほど白井がのした男が落としたバッグが、彼女の足元にはあった。

男の言うには、郵便局の金よりも、ATMのほうが有益だと。ワイヤーを車に繋いで逃走するらしい。

風紀委員として人質を無視するわけにもいかず……とその時であった。

ビイイイイイイイイイイイ!

ゴウンゴウンゴウン……

おそらく局員が押したであろう防犯装置により、警報とシャッターが下り始めた。

それを見た固法は、客の命より金を優先する郵便局にあきれるが………それどころではない。

警報で作動するようになっていたのか、警備ロボが機動を始めてしまったのだ。

「面倒なことを………」

男はつぶやくと右ポケットに手を突っ込んだ。それを見た固法は、自らの透視能力を使って手の内を暴こうとするのだが………警備ロボの陰に隠れ、白井が突貫したことで計算が狂った。

男が取り出したのは、パチンコの玉ともそう変わらないサイズの鉄球だった。

投げると、慣性の法則を無視して進み始め………警備ロボを破壊した。

爆発。陰に隠れて突貫を仕掛けた白井の身に危険が迫る。慌てて回避しようとした白井だったが、何かが盾になったようだ。

「何が………！ そんな、どうして！」

白井を庇って倒れたのは、上司の固法だった。

「手の内が分からないうちは………突入しない。………覚えておきなさい………」

それだけ言うと糸が切れたように固法は崩れた。

「し、しっかりして……?」

パニックに陥った白井は固法をゆるするも、当然起きる気配はない。と、その時。

「が!？」

顔面を蹴っ飛ばされた白井は、数メートル吹っ飛んだ。

「白井さん!」

涙ながらに初春が叫ぶ。白井を蹴った男は、なんと先ほど伸したはずのニット帽の男だった。

「そんな……」

「オマエ、さつき警備ロボに隠れて妙なことしようとしてやがったな?」

「ぎゃああああ! あぐ! あああ!」

足首の関節を思い切りコートの人に踏みつけられ、さらにニット帽の男にみぞおちを蹴飛ばされる。

「ささつきはよくもやってくれたな?」

ニット帽の男の右手には、チャカがまたも握られていた。

(最悪ですわ……。わたくしのせいですの。わたくしの軽率な判断のせいで初春は捕まった。先輩は負傷させてしまい……)

白井の脳内はゆっくりと時を進めていた。

(何てザマですの……半人前以下ではありませんか)

もう白井の体はピクリとも動かない。それを見越した二人の男は、互いに二言三言交わしていた。

「つつ、さつきはガキに伸されやがって」

「す、すみませんなんだな……」

と、そんな会話の最中に、白井は密かに手を伸ばす。初春の……右足首に。

(瞬間移動！)

レポート

「え……?」

いきなり外へ放り出された初春は、何が何だか一瞬分からなかった。だが、すぐに白井の仕業と気づく。

「白井さん!？」

「初春……無事、ですわね?」

「白井さんも早く外へ!」

「私は、まだ自分を飛ばせませんの。それに……まだ事件を解決していませんから」

二人の男は啞然としていたが、すぐに我を取り戻すと。

「このアマ……余計なことを」

「まあ、コイツを人質にすればいいんだな」

(……大見得を切ったものの。どうしたものでしょうか)

一方、外へ飛ばされた初春は、かたつぱしから道行く人に助けを求めていた。

「強盗だって？」

「誰か警備員に連絡しろよ」

「もうしてるだろ」

「関わりあいにならないほうがよさげだな」

そんな絶望的な反応に、疲れ切ってきたころ。

初春の前に現れた茶髪の少年が、そつと頭を撫でた。

「お願いします！ 強盗が！」

「うん？ どうしたんだいお嬢ちゃん」

「！ えと、助けてください！」

初春に絡んできたのは二人組。入学前の少女が知る由もなかったが、“柵川の公式チート”その人たちであった。

「だってよ静那」

初春の頭を撫でていた茶髪が、後ろの黒髪を振り返る。すると黒髪はため息を吐いて、

「テメエ……こんな小さい子誑し込んでんなよ？ 帝督」

「うるせ。とりあえず、強盗だってさ」

どうする？ とでも言いたげな茶髪に、黒髪はニヤリと笑ってシヤッターを睨みつけた。

「まあ、元々郵便局に用があつてきたんだ」
「そうだったよな」

お互いの拳を突き合わせたのち、帝督と呼ばれた茶髪が初春の視線に合わせてしゃがみこんだ。

「安心しな。俺たちが助け出してやる」

「……この状況で余裕だな？」

コートの男があざ笑うように言う。白井は、既に虫の息だった。

「さて、もう遊びは終わろうか……」

と、鉄球を男が取り出したその時だった。

ドガーーーーン！！

「なんだ!?!」

「!?!」

「…………？」

シャッターが木端微塵に粉碎され、冬の寒い日が差し込む。と、そこに立っていたのは二人の少年。

「んだあ？ 女の子一人ボロボロじゃねえか。こりゃ、頑張ってる抵抗してた口か」

黒髪が吐き捨てるように言うと。

「コイツラ……女の子に手を出していいとでも思ってたのか？」

茶髪は怒りのオーラを全開にしてキレる。

「…………なんだデメエら」

「おお前ら、おとなしくするんだな」

鉄球の矛先を変える男と、チャカを向けるニット帽。

「なんだと言われてもなあ。なんていうよ帝督？」

「そうだなあ…………俺たちは通りすがりの」

「「学園都市最強ってとこかなあ！？」」「」

戦闘が始まった。

倒れ伏していたわたくしが顔を上げると、そこには二人の少年がいた。だが、危険だからと止めるような気力も残っていない。

「なんだと言われてもなあ。なんていうよ帝督？」

「そうだなあ……俺たちは通りすがりの」

「学園都市最強ってとこかなあ!？」

学園都市……最強？

ネギやら大根やらが入ったビニール袋を引っさげて……ずいぶんと庶民的な学園都市最強ですね。

「テメエらなめてんのか!？」

コートの男が叫ぶ。と、黒髪はそのビニール袋からネギを取り出して構えた。

「首領 ツチソード」

……ふざけてますの？

「静那!？ お前なにしてんだよ!」

「あ？ ああワイワイワイ。はい、魔剣大根ブレード」

静那、と呼ばれたほうの殿方はそう言って帝督という方に大根を渡す。つていやいや。

真面目にやれ、と怒鳴りたいのでしょうか。帝督さんは肩をプルプル震わせ。

「面白エ」

「マジですよ!?!」

大根を握りしめ、にやりと笑ったビジュアル系の殿方。酷い絵ですの。

「テメエらああああ!」

バカにされたと取ったのでしよう。コートの男が鉄球を投げます。

「絶対等速。これが俺の能力だ! この玉は鈍いが、壊れるまで自動で突き進む!」

……それが、先ほど警備ロボを粉碎したタネだったのですのね? それに、ネギを持って挑む黒髪の、爽やか系殿方。……こちらもひどい絵ですわ。

「チヨナンカーン!」

ゴギヤ!

「!?!」

鉄球がネギに叩き潰されましたの! どういうことですかのそれは!?! 何の能力を使ってらっしゃるのでしょうか!?!

「なんなんだよ!?!」

「おお前ら拳銃が怖くないのかな?」

キれるコートの男とは裏腹に、喜悦の表情で拳銃を向ける男。ま

ずいですわ、彼らは一般市民……。

「「で？」

「……は？」

殿方二人の声がハモリましたわ。というか強盗をなめてますの！
これじゃ本当に危ないですわ！ 拳銃なんかで撃たれたら……！

「じゃじゃあ死ねばいい！」

まずい！

ダァン！

鳴り響く銃声。黒髪の殿方が撃たれましたわ！ ……つてアレ？
居ない？

ど、どこへ行ったんですの！？

「野郎、どこ行った！？」

「どこなんだな！？」

強盗たちにも分からないようですわね……。

「奇跡の大脱出う！」

「わあああああ！」

目の前のATMから出てきましたわこの殿方！ 何がどうなってますの！？

「……ありゃ？ こりゃひどいな、大丈夫か？」

「……このくらい、なんともありませんの」

「治すことはできないけど……痛覚麻痺させとっつか」

「……はい？」

おっしやってる意味が……って！

「あちらの殿方は大丈夫ですよ！？」

「ああ平気だろ。兵器だし。あ、うまくね？」

「全く面白くありませんの！ 相手は拳銃を持ってるんですよ？」

一歩間違えば……」

「あゝ、死ぬかもな」

「そうですの！」

「あの二人」

「殿方がです！」

く。こ、この男……調子が狂わされるなんてものじゃありませんわ全く。

と、そこにコートの男が現れる。

「おいデメエ……ふざけたマネしやがって」

見下すような目。コイツ、こう見えてかなり強いですわ。このふざけた殿方に相手が務まるかどうか……。

っ。真横でコートの男を見据える姿がなんとも……ふざけてないでもないわね。

ギヤップ萌えというやつでしょうか。真面目な瞳に宿る光が少しかっこいいですわね。

「まあ、ちゃんとやれば三秒足らずにお前つぶれるけど……殺しちゃうまじいからな」

「当たり前ですの！　というか、その前にご自分の安全を！」

「あゝ、痛覚は消しといたけどあまり動かない方がいいよ？　悪化するから」

「！」

い、いつの間にか痛みが消えてましたわ……。

「三秒だと……？」

「ああ。だいたいそのくらいで終わると思う」

「ふ、ふざけやがってえ！」

そう怒鳴った男は、鉄球を大量にばらまいた。このままでは避けることも……！

「はっはあ！　誰が一個しか制御できないと言った！　これでお前も！」

「……誰がそんなこと聞いたよ？」

「は？」

一瞬で鉄球が霧散した。

「……え？」

わたくしも理解が及びませんの。どういっことでしょうか？

見れば、コートの中も愕然としている。

一人、その中で笑みを浮かべている黒髪の殿方。

「簡単だよ。鉄の沸点を変えただけ。常温では、鉄という成分は気体になります」

「！？」

「この世の理を操った？ そんな、演算負荷もほとんどなさそうですのに？」

「な、そんなことできるわけが……！」

驚愕から醒めない男に対して、黒髪の殿方はガシガシと後頭部を搔いてため息を吐く。

「できちゃうんだよね。まあ、運が悪かったと思って諦めてくれよ。法則は俺が作り出すんだからさ」

「！」

その台詞……！

「貴方……まさか第零位？」

「まあな。とりあえずコイツは拘束してくれ」

「あ、はいですの」

茫然自失の男を後ろ手に逮捕する。

！ そういえば、茶髪の殿方は……！！？

「なんで銃が撃てないんだな！？」

「いやあ、俺だけなら別にいつでもいいんだけどさ、ほかの人が撃たれてもアレだし。火薬に含まれる物質と結合する物質を作り出して、固めただけだ」

「訳が分からないんだな！？」

「あ、そ。じゃあ、これだけ分かってくればいいや。俺の未元物質に、常識は通用しねえ」

……第二位でしたの。まさか、この二人が“柵川の公式チート”
とは……学園都市最強、ダテではありませんのね？

「んで、大丈夫か？」

「はい、なんとか」

二人の殿方に送られて、今は支部の前。

この方たちには礼を言っても足りないですわ。

「今回は、わたくしの不手際が原因で一般のあなた方にもご迷惑をおかけしてしまいましたの。本当に申し訳ありませんでしたわ」

「……まあ、俺たちはやりたいようにやったわけだし。いいんじゃないの？」

「そーそー。とりあえずは、まだ君は見たところ小学生なんだし。反省を踏まえて、これから第一線で活躍できるように頑張りな。急がば回れってな」

ニヤツと笑う、お二方。この方たち、本当につかみどころがありませんわね。

それにしても。

急がば回れ………ですの。これから第一線に立つために、今はすべてにおいて力をためるべき。確かにそうですわね。

「本当にありがとございました。よろしければ支部でお礼を兼ねて……」

「「じゃあな。始末書はごめんだ」」

「あ、ちよつと!？」

なぜ始末書のことかバレ……ああ、あの方たちはいつもそんなことばかりしてますわね。知ってて当然ですよ。

にしても……かたや純白六対の翼、かたや竜巻のようなブースター。空を飛んで逃亡されるとは、やはりLEVEEL5は規格外ですね。

@

「し、失礼いたしますの」

「あら、歩いて大丈夫なの？」

白井が支部に入ると、そこには固法美偉が包帯を巻いてそこにいた。

唐突に、白井はバツと頭を下げる。

「今回はわたくしの独断専行でご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした！」

固法は驚くが、白井は押し通すように続ける。

「自分の未熟さを痛感しました！ ですからその、よろしければ…」

いったん口ごもるが、がばつと顔を上げて、白井は言い切った。

「これからもご指導ご鞭撻をお願いします！ この街を守るのにふさわしい風紀委員になってみせますの！」

真摯な目。それに少し固法は押され……笑った。

「そうね、そうよね。アレコレなやんでも、結局目的はそこなのよね」

笑顔のまま、固法は白井を撫でる。

「うん、もちろん私に伝えられることはこれからも伝えていくわ」

「あ、ありがとうっね……」

「にしても」

一瞬で目つきが鋭くなる固法に、びくっと体を震わせる白井。ここまでキレた目をした彼女を、見たことがなかったからだ。

「ど、どうしたんですの？」

「まさか現場で私が倒れたあと……“ 柵川公式チート（あのバカども）” が来るなんてね……！」

「な、何か因縁が？ あの方たちはわたくしをこの目の前まで送ってくださいましたし、なかなか優しい方々かと……」

「ここの前に居たあ！？」

「!？」

ギリリ、と歯ぎしりする固法。いったいどうしたのだろうと泣き出す寸前の白井。

「わかったわ。貴女に教える最初の仕事は、貴女自身の始末書と」

コツコツと歩き、事務所の奥から固法は一抱えもある段ボールを持ってきた。

それを無造作に開けると……

「なんですの？ コレ」

「この溢れんばかりの始末書を、アイツら二人に書かせることよ……！」

前途、多難だなあと、白井は天井を見上げた。

@

「なんか寒気がした」

「静那……きつとそれはこの状況のせいだ」

「確かに、この寒いのに廊下に正座はな……」

「何か言いましたか二人とも？」

「「なんでもありません!!」」

「じゃあ、この大根とネギに血がついてる説明をしてくれませんか？」

「あと、すること超分かってますよね？」

「「買いなおしてきます!!」」

024 郵便局にて、強盗と相対す（後書き）

いやあ、原作に初介入じゃないですか？
超電磁砲のほうですが。

次回も、原作に介入していきます！

025 俺たちのメリークリスマス(前書き)

……というには少々遅いな。

025 俺たちのメリークリスマス

12月24日、今日は俗に言うクリスマススイヴである。

ここ学園都市もイルミネーションに包まれ、夕暮時となった今をたくさんの人が行き交っていた。

「……で、なんの用だよビリビリ小学生」

「もう中学生よ！　そしてビリビリって言うな！　御坂美琴って名前があんのよ！」

「いいよ、三段ツツコミとか疲れるだけだから」

「ア、アンタはホントに……」

寒空の下、鉄橋を歩いていた俺の前に立ちはだかつたのは常盤台中学の制服を身にまとった少女、御坂美琴である。

なんなんだよ。俺は早くケーキ買って家に帰りたいんだが。

「勝負しなさい！」

「勝負？　……じゃあ手だせ」

「ふえ！？　な、なんでよ」

戸惑いながらも右の手のひらを出す美琴に。

「じゃんけんほい」

「！？」

すかさずチョキを出して。

「はい勝利。ではさようなら」

「待ちなさいよおかしいだろコレ！？　勝負ってじゃんけんのこと

「じゃねえし！」

「違うの？」

「違うわ！」

「じゃあ何がしたいんだよ。」

そう聞くと美琴は急激に帯電を始めた。ビリビリとプラズマ音ま
で聞こえてくる。

さらに、コインを取り出して、俺に突きつけた。

「私はとうとうLEVEL5になったのよ。それも第三位、電撃使
いの頂点にね！」

「おお、マジでか。……ああ、だから戦えと」

「そうよ！」

成長したなあ……初めて会った時はLEVEL3だったのに。つ
てことはアレか、反射防壁の後釜がやっと座ったってことか。帝督
の一個下とは……こりゃかなり強えんじゃねえの？

と、内心冷や汗だらだらな俺を見て妙に得意げになった御坂はそ
こで、そのコインをもてあそび始めた。

「ねえ、^{レールガン}超電磁砲って知ってる？」

「^{ロールパン}酵母発酵？」

「そう、^{レールガン}……って違う！ このままかっこよく説明したかつ
たのに何を言ってくれてんのよアンタは！」

「電撃でパンでも発酵させるのか？」

「どうやって！？ むしろ教えて欲しいって言うかロールパンじゃ
ねえし！」

「フレミングの運動量を借りて、砲弾を撃ちだす」

「そんな危険な食べ物なのっていうかそれ^{レールガン}超電磁砲！ アンタ知っ
てるでしょどう考えたって！」

「まあ、この前発表されたしな。統括理事長いわく、LEVEL5の広告塔らしいじゃん？ 頑張ってくれよ〜」

「……ホント、ムカつくわアンタ」

盛大なため息を吐いた御坂。まあとにかく。

「んで、戦うのか？ クリスマスイヴに？」

「そうよ！ 聖夜とかどうでもいいの！」

「……最愛にケーキ買ってさっさと帰りたかったのに。まあいいや。河原行こうぜ」

「え？ 今誰の名前出した？」

「ほら行くぞ〜」

背を向けて歩き出した俺に何か御坂が言ってきた気がしたが、まあいいや。

さて、ぶっちゃけ電撃使い相手ならいくらでもやりようはあるんだがな。一番簡単なのは電撃に沸点つー概念加えること……厳密には電撃の際に荷電粒子の概念を捻じ曲げて元素を作り出し、それをさらに発生する電熱に合わせて蒸発するよう仕向けなければいけないので非常にめんどくさいのだが。

……疲れるからそれは今回除外。LEVEL5なんつーヤツの電気は底なしな気がするしな。

となると……荷電粒子自体、俺の皮膚に流れなくしてしまつか。

……でもそれだと俺の動きが鈍くなるしな。攻撃できない。

あ、空間に導体の概念持たせるか。俺が空間指定すればそこを絶縁体に行けるようにして。うん、これで行こう。

そうこう考えてる間に河原へ到着。さて……実行！

「さあ、いつでもかかってきな」

「行くわよ。……電撃が!？」

「流れないよな？」

そう含み笑いしつつ、俺は御坂の放ってきた電撃を打ち払う。さてこちらは。

土埃を巻き上げ、そのまま御坂へぶつける。

「くっ！」

「お。砂鉄かぁ、考えたな」
「当たり前よ！」

俺の土塊を、蛇のように唸る砂鉄で粉碎しやがった。なるほど、そういう応用もあるわけかなら。

「とんだ!？」

「おう、空中戦は、大丈夫か？」

「バカにしないで!」

ブースターで飛ぶ俺に、次々と撃ち落とすように電撃が飛来する。一つ一つ丁寧に躲しながら、もういいかと思ひ。

「今回はこれで終わりな？」

「んな!？」

一瞬で背後に回ると、電撃を残らず打ち払った。ふ、と肩を落とした御坂が俺に向き直った。

「はぁ……第零位はまだ遠いわね。でも次は絶対勝つ」

「代名詞の超電磁砲も、使ってないわけだしな。まずはーとくを倒してから来い」

「^{ダイクマター}未元物質ね……絶対勝つわよ！」
「およ？ 知ってたんだ？」
「ええ、二年前の柵川祭以来、三回分見てるし。前友人の家に遊びに言ったら来たわよって！」

はっとしたように俺を見た御坂。ん？

「アンタ、ケーキ買って帰るって行ってたわよね!？」
「うん？ 俺と妹の分しかないぞ？ お前も来たいならもう少し大きいサイズ買っけど」

「そうじゃなくて！ そのその妹！ 名前は!？」

「最愛だが？」

「やっぱり!？ え、でもアイツの名字は絹旗だったはず」

「あれ？ 最愛の知り合い？」

「あ、本当に兄妹!？ 世間さま！ っていつか名字違うの？」

「義理だからな」

「……まあ、すっきりしたわ」

……まさか、あのブラコン娘のお相手がコイツだったとは。

前を歩く学園都市最強の背を睨みつつ、そんなことを考えていた。確かにLEVEL4のアイツでも問題のない兄貴だわ。

背中も意外と広いし、堂々としてるし。初めて会った時は助けてくれたし。おちゃらけてるけど、かつこよくないといえばウソになるしって違う！ 何考えてんのよあたしは！

嫌いじゃないけど……恋愛感情なんかじゃ、ないんだから。
酵母発酵ロールパンとか言われたし。

「……もしも最愛？ うん、俺。知り合い拾ったから一人連れてつてもいいかな？ ……え？ 女の子だけどそれがどうかって耳が痛いから叫ぶなよ！？ ダメじゃないだろ、最愛の知り合いの……
ビリビリ小学生イタ！？」

なんでコイツは人の名前を憶えないのよ。私の顔見て一瞬躊躇したのはどういうわけ？ まさか、分かっててやってる？

……まあそんなことより、アイツのブラコンぶりよね特筆すべきは。

連れてくるのが女だって分かった瞬間叫ぶとか。こわ。どこのヤンデレよ。

「うん、そうそう御坂。え？ ああうん、分かった。代われっ

て」

と、私にケータイを差し出してくる藍藤^{コイツ}。
仕方なしに受け取り耳に当てると。

『 御坂ですか？ 』

『 そうよ？ 久しぶり 』

『 ……お兄ちゃんに何をしたんです？ 』

声のトーンが死んでる件について。

って言う間にアイツはケーキ買いに青いコンビニ入っちゃったし。
私行くなんて言っていないわよ!?

「 え？ いやその…… 」

『 墮としたんですか？ お兄ちゃんをその超生意気にも可愛い顔で
オトしたんですか!？ 』

「 生意気って何よっていうか違うわよ！ 私との勝負に勝っただけ
d 「

『 勝負!？ 私に勝ったら好きなことさせてあげる、なんて言っ
たんですか!？ 』

「 言っていないわよ！ 私は 「

説明に要した時間、10分。アイツは何をやってるのよ。

……店員の人と一緒に踊ってるし。

「 アイツは何がしたいんだー！ー！ー！ー！ 」

『 !？ 超どうしたんですか御坂!？ 』

「 私の苦勞を置いて、店員の人と踊ってんのよあのバカ! 」

『 ……超諦めました。お兄ちゃんのそういうところは超直しようが
ないですし 』

「まあいいわ。私はいかないから、アンタは愛するお兄ちゃんを
いぜいイチャイチャしてなさい」

『ひゃう!? うう、お兄ちゃんとはまだそんなイチャイチャする
ような関係じゃあないですよ……』

「ああはいはい、ブラコン乙」

『むっかー! いいですいいです! じゃあ切ります』

プツ、と通信が切れたのを確認して、ケータイ画面を見る。

「待ち受けで何がしたいのよアイツは……」

ふと戻った待ち受け画面には、世界の株価情報がぎっしりだった。

……ホント、ここまでよくわからない人間見たのは初めてかもし
れないわね。

無茶苦茶だし、アホだし、最強だし。

最愛が溺愛してんのも、なんか少しわかるかも。……。

「って、私は何を考えてるのよ」

ため息を一つ。すると、ケーキを抱えたアイツがやっとコンビニ
から出てきたところだった。

「あ、悪い待たせたな。んじゃあよつてく?」

「いいわよ。私門限あるし、寮監怖いから」

「……そっか」

ケータイを渡して、駆けるようにアイツから離れる。なんだか、
もやもやした気分が胸から取れなかった。

寮に帰って、そのままベッドに飛び込む。ポフッと空気がつぶれる音がして、少し気分と同調した感じがした。

テレビをつけて、そのままゲコ太の枕に顔をうずめる。耳に入ってきたのは、占いだった。

『AB型のあなたは恋がうまくいかない様子。ライバルに負けないよう、気になる相手の心を掴む努力を惜しまずに!』

……。

「別に、アイツのことが好きじゃ、ないんだからあ……」

心なしか熱い顔を冷ますように、もっと強く顔を枕に押し付けた。

御坂がピューっと居なくなってしまったので、ケーキ片手に帰宅路をのんびり歩く。

鍵を取り出しつつ、マンションの階段を上り、部屋の前へ。

ガチャリとドアノブを回して扉を開くとそこには、可愛らしいサントさんが居た。

「お帰りなさい！」

「あ、お、おう。その恰好はいつたい……？」

「超寒いですけど……お兄ちゃんのそんな顔が見られたら超満足です！」

そう言っつてパタターとリビングに戻っていくミニスカサント。え？ 何あの可愛い生き物。

「……早く入ろう」

とりあえずリビングにはいかず、自分の部屋に入る。最愛に一応プレゼント用意してたしな。

机の上に置いてある、手のひらサイズの封筒をポケットに入れて。

リビングへと戻った。

「お兄ちゃん、超頑張りましたよ！」

「七面鳥！？ ずいぶん豪華だな……と、はいケーキ」

「やた！ 後で食べましょう！」

最愛にケーキを渡すと、嬉しそうにスキップしながら冷蔵庫に行った。そこで、ポケットのバイブが唸る。

パカッとケータイを開くと、二件のメールが入っていた。

『from:とーま』

本文：メリークリスマス！ 俺は実家に帰ってるけど、学園都市のほうはどうだ？ ちなみにこっちの雪、綺麗だから送っとくな。それじゃあまた年明けに。お休み親友』

たぶん、オコタから出ないで取ったんだろ。洋室の窓越しに、確かに綺麗にちらほらと雪が舞っていた。こっちは今日降ってないからつらやましい。雪の予言なのにな。あ、でももうそろそろか。

「お兄ちゃん！ どの写真ですか？」

無邪気にぴよぴよこと俺の横から覗き込む最愛に、当麻から送られてきた写真を見せる。

「当麻の実家だつて」

「へえ、綺麗ですね」

笑いながら、俺はもう一通のメールを見ることにした。今度は帝

督からだ。

最愛も、あ、てーとくんからだ、なんて言ってるので見せることにする。

『from:てーとく』

本文：ツリー、綺麗だぜ！』

こちらも添付ファイルがあつたので、開く。すると、里奈と頼を寄せ合つてツーショットしてる帝督と、その背後で綺麗なイルミ光を輝かせているツリー。人気のデートスポットからの写真だった。

「アイツら、イチャイチャしゃがって」

「……あう」

苦笑する。あれで帝督、女誑しの癖して鈍感だから始末に負えないよなあ。付き合っていないんだぜ？ あんな写真まで取っておいてまあ、時間の問題かもしれないけどさ。

「……」

「ああそうだ最愛、クリスマスプレゼント」

「……あう」

「最愛？」

「ひゃい!？」

顔を赤くしていた最愛。熱でもあるんだろうか？

とりあえず、プレゼントを渡す。

「あ……年間パス。お兄ちゃん！超ありがとうです!!」

「はは、そう言ってもらえると嬉しいよ」

とあるシネマの年間パスポートである。意外と高かったけど、喜んでもらえるならよかった。

と、最愛がそこでポケットから、何やら細長い袋を取り出した。封筒のようなサイズの、プレゼント袋である。

「これは？」

「お兄ちゃんへのプレゼントです！」

「ありがとう」

「ちょ、超心配です、けど……」

照れながら目を背ける最愛。ついでにしきりに手をすり合わせているのが愛らしい。

開くと、ネックレスだった。銀の、鎖のような。下がっているのは、“law”の綴り。

法則……作り出す、なんて言ってる俺に、ぴったりのネックレスだった。少し、恥ずかしいけれど。

「ありがとう、これからはこのネックレス付けることにするよ」
「超うれしいです！」

不安そうな表情から一変、華のような笑顔になった最愛。

と、そこで先ほどと同じように頬を染め。

「あの、お兄ちゃん。メールくれた二人に、返信しません？」

「ああ、するする。どうした？」

「写真、取って。ほら、ちょうど雪も降ってきましたし」

「そうだな、いいかもしれない」

笑ってそう言うのと、再度最愛は可愛らしくほほ笑んだ。

@

場所は違えど同じくクリスマスを満喫していた、静那の親友二人のもとに、メールが一通届いた。

『from: 静那

本文：こつちも楽しんでるぜ！』

添付されていたファイルの写真では、屈託のない笑顔で真新しい
ネックレスをつまむ静那と、隣で恥ずかしそうにしている最愛の可
愛らしい微笑み……そして、おいしそうな料理と粉のように舞う雪
が、背景を飾っていた。

025 俺たちのメリークリスマス（後書き）

原作介入するつもりだったんだけどな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6467w/>

とある無敵の法則解析《アナリーロウ》

2011年12月29日06時49分発行